

Pensoj flugas trans la land - limon

The Senryu Zasshi

麻生路郎女主人



No. 289

六月号

昭和廿六年七月一日發行第六號
三浦郵便物部認可
（毎月一回一日發行）
創刊大正十三年
通卷二百八十九号

川

柳

の

証

六月号目次

題 字……………麻生 路郎
表 紙……………福富 雷童

第四路郎師句碑……………浜川久米雄記…(六)
ホテルを遺して……………吉田 水車…(六)
窓 口……………麻生 路郎…(二)
川柳原理(完)……………福田山雨楼…(三)
九州の 旅……………弘津 柳慶…(八)
句評・川柳街……………
霞乃・若菜・白香・
良子・茶々・梨里

「古くとも」の句碑に就て……………麻生 路郎…(六)
小説・將軍娘……………山路 閑古…(三)
唄は朽ちず……………安川久留美…(三)
不朽洞賞受賞者の横顔……………瓜平…(二)
川柳加藤蛇の目紋……………阿達 義雄…(一〇)
女性と笑……………麻生 霞乃…(七)
詠史川柳「つぼん」……………戸田 吉方…(一三)
不朽洞喫煙室……………
豆萩・鮎美・妄夢

★

不朽洞句帖……………麻生 路郎…(五)
近作柳檣……………麻生路郎選…(六)
川 柳 塔……………麻生路郎選…(八)
同舟近詠……………諸 家…(四)
一路集「お経」……………戸田吉方選…(三)
各地 柳壇……………吉田水車選…(四)
動 靜……………
不朽洞全から……………
編輯室にて……………(六)

外泊の出来ない稼業

中島生々庵氏

(四 句会優勝者)

電話南の三九八四(三休橋)生々庵といえげそばでも注文したくなるが、生々の語が好きで母堂の隠居所も生々庵だそうである。皆に別れ夜夜汽車で滞る稼業者稼業

不朽洞賞受賞者の横顔

川柳の外の趣味で、十八番の追分は軍人志して機械体操や号令の句碑もある。



中庭にすべり台が設けられすべりこん親は涼しいと待たる。

の練習をやっていた時代の所産。現在では小唄を辨流の小淵梅師匠に習ひ、日本画は故橋本関雪の高弟木村杏園画伯に習っている。且邦さん藝であるうが、趣味としては上々。

モームから妄夢

福田 妄夢氏

(五月句会優勝者)

つまみ喰いゆつくり喰べてみたい

が天位で第一位獲得。三十才の若手だが、句歴は中学出たての十八才より魚澄潮潮さんを慕って手ほどきを受け、近所の豆萩さんを紹介されてより、父代りに可愛がられて句も磨かれた。好きな作家は新鮮味のある野介氏で、われを焼く煙はさぞや青白しりなどに特に魅力を感じるそう。

西洋の小説家モーム作の「月と六ペンス」を愛好していたのでモーム(妄夢)をもじった。

さぞかし夢も多いことだろうと聞けば、多過ぎて失敗ばかり、戦前は呉服屋のボンボンで暮したが、戦時中に織物統制会社、軍需工場などに勤め、不運にも行く先々が整理統合、破産で轉々と職を



変えた揚句、戦災で丸裸になり、終戦後阿倍野の開市で衣料を賣ったり、うごんを製造したこともあるが、思わしくなく結局現在の貸本業を思いつき、大阪でトップを切り、今では三人雇っている親方だそう。一見青白きインテリめいているが、よく見ると面構えが逞しい。

絵と文 種 瓜平

明るく… 強く… 徳用お

トシトシ 電球

松下電器産業株式会社

アサヒビール



川柳原理 (4)

福田山雨楼

3 川柳の實態

① 俳諧と二律背反

「二律背反の法則が凡ての物事に適合せられねばならぬと同様、俳諧もまた二元であらねばならぬ。寂の場合と笑の場合がそれである」と「俳諧史研究」の著者佐藤一三氏は云つてゐる。そしてその因つて来るべき理由として次のように述べてゐる。

「我等の祖先は生れ乍らにして自然の懷に抱かれ、自然と親まねばならぬ農業民族であつた。自然は限りなくなつた。しかもあり、亦その怒りに対しては嬰兒の如く其の膝下に這ひもとほりて乞はねばならぬものであつた。然うして徐にわが國民性は結成せられて行つたのである。彼等は明るく淨く直くあつた。彼等は草木を愛し自然を楽しみ、樂天酒脱でもあつた。あらゆるもの、杯種がそこに降されてあるやうに、亦わが俳諧の種子をも我々は其処に見出さねば

ならない」

また「俳句と日本國民性」の著者杉田瓢村氏は、國民性の特色として十三を挙げてゐるが、その中で敬上性、愛名性、溫和性、愛自然性、幽女性、同化性などは寂に導いたものであり、感激性、正直性、現実性、樂天性、潔白性、淡白性、諧謔性は笑に即したものである。勿論、この兩者間には寂、笑いづれにも即するものがあり、画然と二分することは無理であるが、興味ある分類と見ることが出来る。しかしこの俳諧の二元性も、源流をたどればかなりの曲折と交遷がある。即ち和歌變じて戯歌俳諧歌となり、更に継歌連歌を経て俳諧の連歌即ち連俳が發生した、そして三轉して俳諧の道が打樹てられたのである。しかも当初の俳諧は滑稽——廣く云へばおかしみ——の謂であつて、宗鑑の俗談平語、守武の氣品、貞徳の風格、宗因の談林、各各その風懷を異にするところ

はあつたが、本質の共通点として何れも滑稽、諧謔、酒脱、輕妙の句風に終始した。これらの詠草は今日から見れば淺薄卑俗、洒落滑稽、機智頓才を弄したる跡が少くないのであるが、俳諧におけるおかしみの基礎を確立し、素の風流の源を切開いた功績は没却することが出来ない。俳聖芭蕉が正風を樹立した後においても、江戸座、洒落風、一茶などが表われて、おかしみの俳諧はその跡を絶つていない。が何と云つても芭蕉俳諧の出現は一大革命であり發展であつた。所謂寂、しおりの提唱、閑寂幽玄なる風雅道の完成によつて、俳諧の面目は一新し、文學的不拔の地歩を築いたことはここに贅言を要しない。

かく俳諧の兩極には寂とおかしみとが対立しており、またその接点では互にからみ合つて入り乱れているのである。二原色が重つて多少ばやけたところはあつたが、大体において寂の境地を俳句が受持ち、おかしみの姿情を川柳が担当したと見るのが至当である。これは別れるべくして別れ、離れるべくして離れたのであるから、おのがじじその面目を發揮することは、当然の歸結でなくてはならぬ。一時雀郎氏によつて「俳諧の正系を継ぐものは川柳である」との提唱がなされたが、俳壇の啓蒙を促し柳壇の自負を示す言葉としては魅力的であつたが、俳句と川柳とが俳諧から分裂し、獨立した経緯を考察するならば、本家争いはあまり意味のないことである。

近來俳壇においては、虚子の開拓した花鳥諷詠の客観詩にあきたらず、素材主義、表現主義、難解派、生活派、人生派、人間探求派、無季俳句などが擡頭して、多彩な起伏を見せているが、同時にホトトギスあたりで、怪い、明るい、ユーモアを唄つた句を散見するが、共に蕉風の寂、風雅の誠から逸脱し、或は行過ぎた俳句ではないだろうか。これに關して風生氏は流石に凱切な言をのべている「現代の悩みの中に生きるわれわれが、殊に不幸な戦争を経歴した若い人たちが、一般の文藝のあとを追つて専ら「思想」や「社会性」を俳句で詠みたくするのは無理もないし、また「埒」の中でそれが

或る程度できないことはないものであります。そう云う野心的の遂行に対しては、日本人的自然観、人生觀、世界觀に深く根ざしているこの俳句と屈に抵抗することを覺悟しなければなりません。それを敢て強行している間には知らず識らずその「埒」を踏み超えることになり勝ちであります。或はまた意識して「埒」を破り俳句の本質を見失つてゐることに気がつかずこれが俳句の新しさなどごんだ思ひ違ひをしてゐる例も見かけるのであります」

「俳句も廣い意味の抒情詩であつて、感情を敍べるものであることは他の詩と異なるところがありませんが、ただ他の詩と變るのは、抒情に必ず季節を藉り、季節に事よせて懷を述べるという点であります。それは結局季——「自然」の象徴としての——に對する關係が濃かれ薄かれ、直接にまれ間接にまれ、必ず根柢に横たわつてゐるということを意味するのであります」

おかしみに川柳原理を求め、俳諧の一半であるおかしみの姿情を墨守すべきだと云う論拠には、必ず反對論が出て、それは川柳の枠を設けて、自ら領域を狭めるものだと非難されるであろうと思つて、傳統に生き、傳統に打樹てら

れた川柳の遺跡を踏みにじり、自律的、恣意的に川柳の限界を拡大するが如き主張は、遂に一般詩に走るか、十七音短詩えのペンを折るか、何れかに清算されるであろうことを指摘してこれに答える。

② 川柳の過弊

自分はこれまで川柳の当爲を論じ、理想を描いた。川柳の長所と特質を挙げたのに急であつた。健康な状態、成長の姿を追うことに懸命であつた。しかし川柳の生理を知ると共にその病理をわきまえることを忘れてはならない。実に川柳はそれ自体の中に幾多のバチルスや寄生虫を持つており、疾患を胎んでいる。加之柳壇的、社会的の悪條件がこれを包圍して、絶えず川柳の進展を阻んでいる。これらの所謂通弊は更めて説明するまでもなく、その項目を列記すれば足りる。

- 1 狂句百年の祟り
- 2 社会的通念としての川柳蔑視
- 3 本格的川柳の社会浸潤不足
- 4 川柳選者の乱立、低下句会の点取競争、興行化
- 5 評論、批判の缺乏及び厭忌
- 6 指導者の人物難、熱意不足
- 7

- 8 句集、研究書等著書發行難
- 9 漫画に用いた句の不用意、漫画の俗悪
- 10 作句の安易さ、乱作、低調さ
- 11 類句や作爲的、遊戯的、自慰的な句の多いこと
- 12 川柳作家の職業的多忙

同舟近詠

ところで、前列記中12で市井人的性格のことにふれたが、これについては一言布衍して誤解を招かぬようにしたいと思う。

川柳は常に非凡を要求する。だからと云つて川柳作家は非凡人でなければならぬと云うわけでない。平凡人、市井人、俗人でよいのである。野人、庶民、勤労階層から出ることが一つの特長でもあり、自然の姿なのである。市井人として生きのび、汗と苦惱の中から生れる句に、本当に底光りのする人間味が發揮されるのである。川柳作家はだから社会的の地位とか、職業、門閥、学識、経験、年齢、性別などにかかわりなく、眞向からその市井人的、野人的性格を投出してかかれればよいのである。その身を以て当り、身を以て作り、身を以て愉む態度、推敲琢磨の中から光り出る作品こそ尊いのであつて、國民文学、大衆詩、勤勞詩の名にふさわしい、新鮮、尖鋭、俊敏な川柳が登場するのである。そこに他の文学に

大阪 橋本 緑 雨
情熱だなど男へ手紙が來
毛糸服乳の大きき見せるやう

松山 前田 伍 健
恋も良しはりまや橋の今むかし
花の旅まねもして見る土佐言葉
箸拳にお酒の強い土佐の友
波に聴け月がなくとも桂浜

堺 山本 雨 迷
我が門を出る年頃は句ひつゝ、
滄浪と五十路の夢を追ふ日あり

清水 富士野 鞍 馬
むすめの友がばあさんになつてゐる
焼酎がだん／＼うまい單物
八十八夜静岡は茶のはなし

歌のさくら閣屋風情に折られたり
南國の女よく飲みよく唄い

- 13 並に市井人的性格の影響
- 14 古川柳模倣及び鶉呑みする傾向
- 15 末番句露悪の傾向
- 16 等々列挙すれば多くの病弊を指摘することができる。しかも川柳原理はその健康の上にこそ成立するものであるから、これらの病弊を駆逐し、疾患に泥まぬように留意することが先決問題である。

ない。俗の中の眞実、俗の中の純粹をつかみ取り、磨き上げて世に問うものである。あくまで豊かな謙虛な心をもつて、俗に接し、俗に徹し、俗を正そうとするのが川柳の正しい在り方である。樂みなことには、俗の中にこそ眞実があり、おかしみが溶け込んでゐるのである。俗の中に入ることなしに、川柳を見出し、川柳を作り出すことは、冒険と云うよりは徒爾である。

けれども厄介なことには、俗の中には誘惑の手がしきりに伸び、その眞実を曲げ、純粹を覆うものが少くない。俗に徹することは決して生やさしいことではなく、非常に至難の道である。入り易く至り難い境地である。だからややもすれば俗にまどわされ、俗に手なづけられて、退散する場合が多いのである。また最初から俗の中に入ることを忌避し、頭から俗を排撃する主張もあると思うが、共に川柳の通弊とする病患たるを失わない。

③ 川柳の文學的向上の途

古川柳が一部の國文學者から輕視されながらも、一般社會人から珍重され、共鳴され感嘆されるのは何がうまいからである。滑稽にしても、穿ちにしても、軽味或は諷刺にしても、おかしみの姿情の上

に立つて、よく人情の機微に
觸れ、肺腑を衝くものがある
からである。

この句のうまさは何処から
來たのか、何が原因である
か、興味ある問題でなくては
ならぬ。先ず句のうまさと云
うことから考察して見ると、
うまさとは單なる上手、巧
妙、智慧、練達の意味ばかり
ではなく、論理的、心理的、
社会的、經驗的に見て内容
的蓋然性を持ち、不適當当性
のあることが考えられる。こ
れは古川柳に批評的なセンス
をもつた句が比較的多かつた
ことに緣因するもので、この
ことは現代川柳の規範にも当
嵌るものである。次に十七音
字と云う制約の關係が考えら
れる。最短詩型しかも唯一種
類の類縁の中に象眼する人事
葛藤、そこに最高度の省略と
壓縮の苦心が結果され、常人
の企及し得ない離れ術がうま
さとして賞讃されることは肯
かれる。更に言葉の選択、駆
使、措字がよるしきを心得て
、言語感覚から來る快調がうま
さを齎すことも理解される。
その他うまさを構成し馴致
したいいくつかの原因があるで
あらうが、これらは一休何が
そうさせたのであらうか。

古川柳が万句合からの選集
であり、万句合は入花料を授
じての懸賞應募であつたこと
は史実の示すところ、さすれば
古川柳のうまさは射倖的熱

意によるものだとの見方もあ
らう。また太平逸民の徒が自
由闊達にその風懷をのべる機
會を得て、天空海淵に言論を
吐露（あまり過激なものとは
者が握りつぶす）した、その
自由の空氣から來たとの見解
もあらう。或は當時の投句家
層が工商の町民のみでなく、
批判者たり得べき智識階級、
江戸時代の氣力あるインテリ
の仕事であつたのではない
か、と云う憶測も成立する。

その他これに類した諸原因
が数えられるであらうが自分
は聊か所見を異にする。自分
は斯う思う。即ち、古川柳の
うまさを生んだものは、江戸
ツ子の心情にあり、その折目
の正しかつた生活態度、社会
正義や倫理道德に敏感であつ
た彼等の俠勇に存すると思
うものである。金森徳次郎氏
は「文字や言葉を軽視すること
は人間精神を軽視すること
だ」と喝破しているが、江戸
ツ子が仁義に厚く、言葉は大
切にし、人情美を尊重した心
根、そこに開花した俳諧、殊
に川柳にうまさ表現された
のは、決して偶然ではないと
思う。

江戸文学には黄表紙、洒落
本、滑稽本、人情本などお
かしまを中心としたものが多い
が、戯作者達によつて作られ
たこれらの著述には暴露的な
もの、諧謔的なもの、低級卑

俗なものが少くなかつたが、
町人自らの手によつて生れた
川柳には、そのおかしみが洗
練された純な姿で現われ、澄
んだ笑いを聞くことができた
のも亦這般の消息を物語つて
いると云えよう。

近代人は往時の江戸ツ子に
比してあまりに心が汚れて
いる。道義の頹廢は云うに及
ばず、清廉潔白人間精神が
麻痺している。この精神的廓
清、建直しは決して容易なこ
とではあるまいが、先ずこの
精神復興が行われない限り、
川柳文学向上の鍵は得られな
いであらう。

- 1 柳誌の合同を図り強力に社会に呼びかけ、厳正批判を受けること
- 2 評論、考証、鑑賞等に学問的研究を盛んにすること
- 3 知らざるを知らずとし詩、歌俳壇との交流を行うこと
- 4 新聞、ラジオ、雑誌等の川柳欄に、古豪、新進を問わず努めて力作を送ること
- 5 新人の育成指導に力を盡すこと
- 6 句会の肅正、改革を断行すること

などが考えられる。要するに川柳の文学的向上は、川柳家の手によるの外はない。川柳家が虚心に反省し、共通目的のために協力し、作句に文化運動に果敢な行動を必要とすること、今日より急なるはないと思ふ。

最後にかつて長谷川如是閑氏が「笑の社会的性質とユーモア藝術」と題して書かれた論述の、結びの言葉を録してこの稿を終る。

「藝術における笑は、嚴正にして正確なる認識が、社会を悲哀による退縮や、憤怒による分裂に導く危険をもつ時に、より深刻な直視的態度に

よつて笑を與へ、同じ認識と批判とを社会的諧調の空氣の裡に展開せしめるものである。

藝術的ユーモアは、破綻の悲劇を喜劇的終局に持ち來す、社会的強靱性の發露である。分裂の運命を結合に引戻すものは藝術的である。それは最高の人間的態度であり、社会的態度である。

ユーモアを單に辛辣のカモフラージュとするのは、淺薄にして力弱い態度であり、藝術的にも低級の態度である」
(附記) 参考文獻の列記省略を諒とされたいが。

(完)

麻生路郎著 水武書房版



川柳を研究したい人にも好適の書

本書は著者が多年のウンチクを傾けて執筆しただけに川柳の新指導書としては唯一無二のものである。「川柳とはどんなものか」から説き起して收むるところ三十七講、平明で親切で、初心者本書を繙くことによつて直ちに川柳作句のコツを会得することが出来る。多年川柳してゐる人たちにとつても又好参考書である。敢て一読を薦む。

(B6版 二二頁) 定價一〇〇円 送料 金十二円

川柳雜誌社

取次柳注文は 大阪市住吉區西内五丁目二五 柳口屋大坂七五〇五〇

第四

路郎師句碑

佛式の除幕式と記念川柳大会——

浜田久米雄記



「古くとも」の句碑に就て

麻生路郎

私の第四句碑が岡山縣和氣郡吉永町福瀧の娛句樂居の前庭に建設され昭和廿六年四月廿二日午後一時に除幕の式典が挙げられた。

川柳による文化運動に多年献身して来た私ではあるが、相次ぐ句碑の建設は全く予期しない收穫であつて、ただ、感謝の外はない。

句碑の句に就ては大森娛句樂氏から特に注文がなかつたので不刊洞句帖の中から、

古くとも僕には仁義禮智信と云う句を選んだ。

昭和廿二年七月一日発行の「川

前夜祭

われらが敬慕する路郎師の句碑はつきつきと建てられて行く。第一句碑は大坂島之内に、第二は奈良縣三本松村に、第三は岡山縣弓削駅前——そして第四は元弓削駅長で第三句碑の建立に大きな努力を拂つた大森娛句樂氏の前庭に建つことにきまつた。ちようど備前支部創立三周年に當るので、三周年記念と句碑建立とを合わして川柳大会を開催することになった。

句碑の建立、大会の準備など四月中二回にわたつて支部同人の打合せをして万遺憾なきを期した大会があつて、四月二十一日夕刻の作業で句碑は出来上つた。路郎先生はその日大阪の句会をすま

され、大阪猪十七時三十分吉永着二十一時二十分で單身西下

されたので、東岸子が十八丁の道を自轉車の荷台に乗つてもらつてお迎えした。岡山から風來子氏が先着、駅の仕事でおそくなつた久米雄が娛句樂邸に來たのが二十二時すぎ、先生をかこんで娛句樂、柳風子、東岸子の六人が前夜祭の歓談にふける。明日はいよいよ大会である。一同明日を約し張り切つて寝に着いた。

前奏曲

傘は要らないといふ先生をお迎えして大会の春の朝はよく晴れて、うぐいすの声を明日に控えた町長、議員選挙のマイクがにぎやかに前奏曲をかなでてくれる。九時すぎにははるばる四國から迷窓氏と岡山の北星氏が一番乗りをして句作に余念がない。十時半

には寛造氏を先頭に岡山駅長天竜氏をしんがり大善二十人の御來場だ。一列にならんで受付子なかなか忙しい。十一時半には大阪から緑雨、豆秋、鮎美、高砂から春巢氏の十五氏御安着。四つの部屋をぶち抜いた会場は満員の盛況である。出席者五十一名備前支部はじめて以來の大会である。井めしで晝食が出る。湯呑は受付でもらつた記念品の湯呑みとは幹事なかなかするいことを考えたものだ。

除幕式

兼、席題とも十三時にしめ切つて除幕式に移る。庭内に一同ならぶ中を宝生山阿部光範寺僧による法会がはじまり久米雄長女の手によつて待望の第四句碑はあざやかに除幕された。時に十三時十五分。

仁義禮智信

路郎

の句は永久にこの庭前を飾り、多くの世人をいつまでも教え導くことであろう。続いて路郎師の謝辞があり、地方を代表して前町長の武元栗太郎氏と、岡山縣川柳家を代表して藤本満年氏の祝辞があつた。前町長は川柳の徳をたたえ、この町に偉大な川柳家路郎先生のしかも教育的なこの句碑が建立されたことは当町の誇であり、世道人心の訓育に不滅の光を放つものであると結び、満年氏は人生五十年といふが先生の句碑が四つ建つたのであるから先生は今のところ二百年は生きられることになる。これから次々と全國に句碑が建てられることとなろうが、いつまでも先生に長生きをしてもらつて川柳の爲にお力を出してもらいたいことを希望した。ついで娛句樂氏はこれまでに建つた句碑の中で、この

柳雜誌」に発表した句で、終戦後、間のない当時の私の心境を眞ッ正直に詠んだものである。句については特に注文はなかつたと云つたが全然注文がなかつた訳ではない。

現在山陽本線の熊山駅に駅長を奉職してられる大森氏が、朝出勤をする時と、夕べ帰宅した時に、親しく接したいのだと云う。その言葉が私の心底に響つていたので句の選定については相當に腐心した積りである。

居士大森氏は悠揚として自己の天職に生きると共に、余暇を趣味の涵養に割き、敢えて浮雲のような榮華をのぞまれない、しかも信念の人、果斷の人、實踐の人である点、私のこの句の心境には必ず共感して貰えるに違いないと信じたからである。

この句に盛りれた思想が古いの新らしいのと云つて見たところ、それは口頭の論議に過ぎない。寧ろこの句の句境に沿うてその生涯を貫らぬことが出来ることしたら人生の幸福これに過ぎるものはないかと今も信ずる私なのである。

媿句樂氏にこの句を呈した所、以もそんなところにあるのである。この句を通じて一人の媿句樂氏を得ることは更に第二第三の媿句樂氏を生むこともあると思えば、敬愛を禁じ得ないものがある。あゝ光輝ある句碑よ、私の代弁者である句碑よ、いつでも健在であれ。

句が一番ありがたい。先生は私の心を見抜かれて私の一番好きな句を與えて下さつた。——ことを謝して徐幕式が終了した。なお附け加えておくが祝辞を述べられた武元前町長は目出度く町長に再選の榮になられたのである。

軸吟五句

記念撮影の後再び句会の席に歸り、備前支部を代表して久米雄の挨拶があつて、路郎師の柳話——今朝案内されて当地の牛神社に参詣したがこの牛頭荒神社は主として百姓の神様で一月五日の大祭には道にはみ出る程のお詣りがあり、おさい、錢も一日で十万円、お供え米が数俵も供えられるのであるが、別にこれといつた設備はなく木は朽れにまかせ、小さな備前焼の牛がうす高く積み重なつていて素朴そのものである。飾り氣のないこの素朴さと川柳とは一脈相通するものがある。など——があつて祝電披露の後席題「君と僕」春巢選を皮切りに席題五、兼題七が順々に披露された。なにしろ出席五十一名、投句二十一名という多勢なので佳吟秀吟が連続し、笑声と感嘆の聲が句会に満ちあふれ、三光にはそのつ度賞品が配られた。最後の兼題「命」の路郎師軸吟は、

余命わづかをこたつとは淋びと

この命花のしほれる如く消えいのちには別條ないが金がなし死ぬ一步手前節操汚すまじ名人は一世代不肖の子を育ての五句であつて数多い先生の軸吟の中で記録破りのことであつた。終つて清風の大会出席を感謝し、今後の御鞭撻を切望する旨の閉会の辞があつて目出度くかつ盛大会のうちに大会の幕が降りた。

唄と歌

大会のふんい氣を満喫して歸る者は残り残つてつぎに懇談会に移つた。柳論に各地柳界の話にアルコイルが入つた柳人の口はいよいよ軽くなつて談笑がつづく。途中弓削町に勤務していた頃作詩作曲をした弓削町小唄の生みの親、媿句樂起つて自演すれば、岡山駅長これにつづいてお若い声で歌謡



念記式幕除碑句るけ於に居樂句娛 (撮影氏雄米久) 氏樂句娛 (日人三) 師郎路 (日人二列前)

曲となり、唄、歌、謡の連発である。久米雄不肖にして二十時頃ぶつたおれたまま前後不覺になつたため、詳しいことはわからないが懇談氣焔は深更に及んださうである。

旅はよし

朝の膳に残つたのが先生、豆秋、久米雄、媿句樂、苑女の五人。盛会でしたなあ、よろしゅうおましたなあ、先生

への参加を募る——規定、自作十句に本籍、住所、勤務先、職業、氏名、雅号、年令(満)を記入、会費百円を添え六月五日までに川雜岡山支部(岡山市出石町六二)又は岡山駅浜田久米雄まで投句されたい(八月初旬刊行)

吉備團子 第三輯

岡山縣川柳人句集
新緑の山山、麦の青、春はうららかなよい天氣だ。突然久米雄の肩をたたかれた先生
旅はよし饒饒として貨車が行くと旅の名吟をものされた。



大阪市 武部 香林

値切られて値切つて道修町暮れる

一瞬に科学は人を骨にして

糸へんご一と眼でわかる折詰を提げ

生活苦闘ごときが値を上げて

酔ひどれが寝るとベンチは狭いもの

ボスターは遊べ〜と駅せまし

紳士とは妻のクリーム少し塗り

飲める人得だワネーと眼をそらし

どうせ私アブレだと云う娘を育て

禁酒なさいと云はなくなつた妻の老ひ

クラス会社長になつた友は来ず

世を捨てた身に鉄骨のただ高く

卒業のアルバムこれで学資済み

夕月は丸く細い僕的首

生字引と言はれ課長の次の次

病中吟 (二句)

年輪のせい十日も寝れば淋しかり

マイシンに頼りべニシリンにも頼り

村長退陣 (三句)

年度末かいな縣から人が来る

退陣へボスのうつろな見舞品

郷党に余生棒ぐる愚を悟り

頼まれて居れどあの娘も縁遠し

追かけて来てまで女の子のわかれ

味のないうどんだまつて喰べる父

愛嬌はたとへ吏員であるうとも

ホノル、内藤 草一郎

やきもちパイの焼き方より難し

ヒスの余波トリストパンが焦げて居り

皆様がそやおつしやいますとちやつかりな

これは又鼻毛を抜けば白かりき

似て居ると云われ貰い子とも云へず

貸せないと云へばそれではお名前を

しらすより

愛すればこそ山脈を隔てたり

綱帯をして飲みすぎの日記書く

旅の夜ののれんはくぐり易く出来

善人のとことんまでの不倖

現実はきびし夕餉の皿の数

戎橋飲まして欲しい人に遇ひ

御相手にされぬ筈なり役交り

ダンサーのあはれサングラスかけてみる

みてほしいうなじへだれもふりむかず

奈良縣 西垣 錦風

女店員男に欲しい気性なり

掛合ひに行きますと云ふ妻の顔

選挙話から商談又そびれ

集金に來て阿呆らしいもみ手なり

相聞歌さて〜七十三とかや

大牟田市 高田 抱逸

財産をはたいて姉妹嫁にやり

ごちそうに心中でないかご子に訊かれ

値上げから質屋流れを賣り惜しみ

無心状態頼るは貴方だけと書き

無智な娘の家出をすれば済むと知り

お妾と知つた行商繁く來る

如才なく選挙へ酒も値上げされ

酔えばとて主義へ淋しく生きる氣の

汚れたるマスク外して春の灯へ

父の辞書そろ〜子等が活用し

人だかり覗けば競輪速報屋

消極な主任に飽いた不平組

二見浦土産の通り陽が昇り

京 (四句)

鴨川も四條辺りてただの水

こゝら辺も京都市どつせ嵐山

キヤツチボール建礼門をバックにし

見落したとこは清水からおしえ

唇のその輝きも春のもの

久しぶり会えば取締役社長

あやす丈あやして逃げる男親

安心と云うは甘へる事なりし

吊し上げの型で終つた痔の手術

鼻紙といつしよに百円札が出る

きさらぎよさらばなんかと言つちや飲み

春の音して流れてるマンホール

大阪府 西尾 栞

大阪府 須崎 豆秋



俺に似て猫も毎晩出て歩き
男になれと駅で訣れた

兵庫縣 北川 春巢

給料もらう日の印鑑を掃除して
流石吾が子十対一をパスして来

スキー靴問われもせぬに値段云う

奈良縣 尾崎 方正

春なほ寒し襟垢少し氣にもなる

家庭手帖間に合うことは書いてなし

下関市 櫻川 不水

おめかしの途中で坊や轉んで来

水車小屋春の日永をまだまわり

大阪市 木下 幽王

女アナウンサーが姑みたいなことを云ふ

出るところへ出て貸金まだ取れず

儲けてる時に死んだ男は幸福さ

御近所に葬式があり妻多忙

男から女へ金は流れゆく

出雲市 尼 緑之助

志を立て、銀座でちびる靴

大橋法務総裁お國入り

らしさも出来てお國入りの弁

大阪市 水谷 竹莊

りんきする妻をあはれと思へども

妻まじき女の肉体もてあまし

金ためる事が恋より楽しいか

恋文を番号つけて残しとき

接吻ぐらいしたわと女平氣でい

避妊法知つて、又も三ヶ月

鳥取市 杉谷 湖山

腰巻の一枚妻の願ひにて

玉砂利の音さえ吾れを脅やかし

粕取りの酔ひにも似たりストリップ

岡山縣 山分 淑郎

盃におぼれるくぼに身を投げる

退屈へ腹立て、みる春のどか

貧乏を友が語れば楽しそう

教養は借着の出来ぬものとしり

おしだまる一手で喧嘩に鼻をつけ

プロカー選挙と称し食ひ下り

大阪市 富岡 淡舟

大阪へ歸つて橋をなつかしみ

淋しさは二度目の電話かけに行く

三荷揃うた姉の晩婚

据膳喰つた果ての双傷

晝は祕書夜は二号の勤めなり

奈良縣 西辻 竹青

かんしやくを飛ばして見たが税は税

山口縣 長野 井蛙

体面は一駄だけの青切符

家計簿も内助に頼る不倖

大阪市 竹田 芦穂

校長の弱点妻が若すぎる

干物の嵩に遠雷響いて来

己さんを拜んだと藝者やたら酌ぐ

女房は強氣酒屋の借のこと

大阪市 上田 春柳

人生また多情なり飛田の灯

アイシャドーストリップはへそを出し

へそくりを持つて心斎橋に出た

誕生日お鯛の代りという魚

大阪市 松江 梅里

糸へんと切れて三筋へ返り咲き

湯呑みまで灰皿になる盛會さ

電話どころか腰かけるとこない住居
花見に来てまで税務署と出くわして

岡山縣 直原 七面山

烏籠の女と二号諦める

御氣嫌が斜ですかと妓つぐ

女ズラリ並んで男寄せつけず

煙草吸う娘に男寄りたかり

マダム今日たかをく、つて犯される

裸体画の前で時計の捻を巻き

宇都市 上林 粗影

法廷日誌童貞みちめにふみにぢられる

他人であれば愉めるストリップ

鳥取市 河村 日満子

人殺し目撃したは疲れきり

こどももう泣いて誓つたのを忘れ

学歴をつけずにおかぬ親の氣の

兵庫縣 田代 尋四

汽車の中だけのスキーヤーとは知らず

花見酒喧嘩に花は忘れられ

妻とする散歩カフェの前をよけ

健康を不遇の中に見つけ出し

アメリカへ行かねば損のように行き

さえすつてゐても小鳥は目をくばり

滋賀縣 黄瀬 美秋

詫つておれば警察早う済み

禁酒から友一人へり二人へり

うかつとはキツス映画へ子と並び

プレスする間を茶漬ですます朝

熊本縣 西口 如川

寄附帳へ煽てが効いて記入され

品行方正口説きもせずに夜が明ける

意氣地無く男妾けにされちまい



岡山縣 福島鉄児
 日本を狭うする子が又生まれ
 独り者器用な針をさげすまれ
 差入を頼む御世辞も云うて置き

京都市 谷内一草
 細い眉女冷たく煙草すう
 正直な方ねと半分馬鹿にされ
 ほの／＼と心の中に住む乙女
 宿直もたまにはいゝと倦怠期
 円満といはれ少しは不服なり

大阪市 福本翻骨
 思惑の膝に南京豆の皮
 壁の恐怖時計が止まつてゐた夜中
 長距離の電話へ下駄が見当らず
 氣短がなくせに魚釣などに凝り
 初対面税務署員をしています

兵庫縣 小島無聖
 學級をすらり列べて家業し
 甘党屋女いきれに汗をかき
 春の宵話本など出してみる
 変電所櫻の中に包まれて

岡山市 西いわを
 すしの味覚え進駐軍帰國
 無作法へ無邪氣とほめる智慧をもち
 同僚と云うも向うは専務の子

岡山縣 服部十九平
 水産課役得らしい鱈をさげ
 機嫌のいゝ妻が十九平さんと呼ぶ
 焼香の様に投票箱に入れ
 候補者は儂だと胸にバラの花
 先約があると小さな嘘を言ひ

岡山縣 大森娛句樂
 心配は掛けまいとする寮を見せ
 山里の客坊やを抱いて汽車を見る

西宮市 田辺由布
 僧正に虫はつまんだまゝ置かれ
 新婚のあまくリンゴへどける味
 肩鉄が賣れりや耐まで値が上り
 六十の恋もきれいな詩人の腫

大阪府 荒木哲水
 吃水線ちらつと見せた未亡人
 義兄死す
 丙午の姉も今日から未亡人

大分縣 桑原表情
 疎閑して帰れすまゝよ立候補
 一票と知らずに患者叱りつけ
 東京を一度は見たい氣で暮し
 ストなどは出来ない妻をふむ日和
 阿蘇山の銀一色へ恐れ入り

兵庫縣 若林草右
 湯上りのくしやみ繞けて立話
 薄化粧螢の光に一寸濡れ
 晴着よりエプロンが似合うよい女房

大阪市 足立春雄
 ガム噛んで注視知つてる紅い唇
 招かざる客と知つたは遅すぎて
 頼りない亭主で水も汲んで呉れ
 けちんばの眼にけちんばが多すぎる
 同権を男勝手なときに言ふ

熊本縣 有働芳仙
 本人は知らず見合の仕度出来

昭和生れ高いバナナへ氣前よし
 大阪府 米田孤舟
 憶面もなく朝の湯へ藝妓が來
 西瓜でもぶち割る様な人殺し
 自殺する旅とは知らず金を貸し

大阪府 浜畑胡蝶
 待たせても女の口の上手なり
 吹けば散る名残の下で酌みかわし
 律氣にもかつぎ屋下アを閉めて降り
 女学生ニコリ男の子と別れ

下関市 石川侃流
 上衣ぬいだ顔を浮氣ツボク見られ
 解決をレールのさびにしてあわれ
 安靜へ看護婦さんはきれい過ぎ
 死ね〜と線路が光る不運の日

岡山市 大倉四案
 男だと言われて墮ろす氣が鈍り
 居睡りをしてるか春の土手の牛
 寝轉べば脚線青空まで続き

たつぷり
 愛嬌たつぷり
 B₁たつぷり

疲勞と脚氣に
メタボリン
 錠・注・無痛注



將軍娘 (六)

山路閑古

(六)

その後、間もなく母が死んで、全く天涯孤独の身となつたので、私はいよいよ遊学の決意を固め、故郷の家を疊んで、上京した。

家を疊んで作つた金は、せいふ、二三年の修業を支へる程度のもので、この先きの永い勉学の費用をどうして捻出するかと、全く当てもなかつた。唯志のあるところ、道生ずの信念を以つて、猪突的に行動したのであつた。

上京後二年ばかりして、當時私は第一高等学校に在學して居つたのであるが、或日品川御殿山にある侯爵家事務所から、面談したい用事があるから、至急來所ありたい旨の通知を受け取つた。

侯爵家事務所といふのは、侯爵邸の中にあつて、侯爵家の諸事業を管理してゐる事務所であるが、それを訪れると、家令とおぼしき人物が出

て應對した。この人は服部と云つて、その後永らく私の面倒を見て呉れ、従つて懇意にもなつたが、初対面の折から、もてなしも甚だ親切であつた。

「実は、さる御方からの御申しつけで、無躰ながら御呼び立て致しましたが、早速御運び下さいまして、ありがとうございます」

と、服部氏は云ひ、其処へ紅茶が出て、洋菓子が出ると云つた塩梅であつた。恥づかしながら、私はこれが洋菓子といふものを見た始めであつた。茶所の靜岡に育ちながら、まだ紅茶を呑んだことがなく、地方庶民の生活と、帝都上流のそれとは、開化の程度に於て、まるで内地と外國の相違があつたやうである。

當時判任属の地方官を勤めて、地方では一人前の男として通用して居つた私も、実は紅茶も知らなければ、洋菓子

も食べたことがないといふ有様であつた。尤もこれは、事務所に於いて左程に鄭重に扱はれたと考へるべきであつたかも知れない。

服部氏は、上京以來の私の就學状況について、つぶさに問ひ尋ねるのだけだつた。そこで私はその一部始終を次のやうに語つた。

上京すると、当時書生の巢窟と云はれた神田に下宿を求め、近くの私立中学の編入試験を受けて、五年級に入學した。一年修業の後、中学卒業の資格を獲得し、翌年七月第一高等学校第三部の入學試験を受けて合格した。三部の試験を受けたのは、將來医者になる目的からであつた。學術研究と共に、直接人命救助にも役立つ医学は、私には最も意義ある學問のやうに考へられたのであつた。

一高入學後は、神田の下宿を引き拂つて、今は学校の寄

宿寮に入つてゐる。寮費は十円で、その他の學費合せて五百もあれば間に合ひ、大休月額十五円で一切を賄ひ得る。但しこの十五円といふ金額は、私が判任属として得て居つた俸給よりも、遙かに上廻る額であるから、貯へも残すところ幾許もない。しかし、費用がなくなれば、学校には貸費生といふ制度があり、大体それに應じられる見込みであるから、學費には差し当り差し支へるやうなこともないと思ふと云ふやうなことをも、序ながら説明した。

それらの事情を逐一聴取した後、服部氏は云つた。

「実は当邸にも奨學給費の制度があつて、目下給費生の餘衛中であるが、さる御方の御申しつけもあり、取敢へずあなたに月額二十円宛支給することになりました。それは今月から御渡し致しますので、これに受領の署名と捺印を願ひます」

と、壁際に据ゑてある小さな金庫を開きながら、何やら書類めいたものを取り出したので、私は急に遮るやうに「私としては別に希望もありませんが、一体そのさる御方といふのは、どういふ方ですか」と聞いた。

「侯爵夫人でいらせられます」

「さうですか。では侯爵夫人にさう申し上げて下さい。瀬木欣三は御当家の御惠みを頂く程に窮しても居りません。これはひねくれで申すのではなく、事情は今申し上げたことで御判りかと思ひます」

服部氏は苦笑ひして、「いや、どうも感服致しました。流石はさる御方の御申しつけの御仁だけあつて、給費をも御受けにならぬと仰言る態度はお立派でございます。そのお立派な態度を御見受けするにつけ、当邸では是非學費を差し上げたと思ひます」

「何と御褒め下さつても、いらぬものはいらぬのですから、卒直に御断り申上げます。どうかお氣を悪くなさらないやうに……」

これが血氣定まらぬ頃であつたなら、侮辱のあまり咬呵をも切つたであらうが、流石に小役人を十年も勤めてのことであるから、婉曲に主張を通す術も心得てゐた。それだけに先方では扱ひ悪いと思つたらしく、人の好い服部氏は、額から汗を流さんばかりにして、

「どうも私の申上げやうが悪かつたかも知れません。実は御承諾頂かないと、私の立場が御座いませぬので……、御存じかは知りま

せんが、あの御方の御氣質として、そのやうに致しませんでした、私が極めてまづいことになりまして……」と云ふのだつた。

私が給費を受けることを承諾せねば、善良な家令の落度となることも、あの負けぬ氣のせつ子姫の氣性から考へて、よく納得の出来ることであつた。どうせ何処からか金を出して貰はなければ、學問修業はなり難いのであるから、さまで意地を張る筋でもなく、その上人助けにもなると思へば、至極貫い易い金なので、私は濫々ながら侯爵家の給費を受けることにした。

興津の清見寺に、榎本武揚の書で、「食人食死人事」と書いた石碑がある。この言葉は、

「人の食をはむものは、人の事に死す」と読み、左傳から出てゐると云はれる。清見寺に杖を曳く毎にこの碑を仰ぎ、幾度かこの言葉の道理を思つたことではあるが、結局さういふ際になつて見なければ、人はこの言葉の眞意を會得しないであらう。

それから七年間、私は毎月のやうに御殿山の事務所に通つて、御苦勞様々々々々々と勞り働らはれながら、月々の學費を恵まれたのであつた。但し學問研究については何の掣肘も受けることはなく、何

を勉強しようとする私の心まかせであつた。大学を出ると、改めて侯爵家からの徳恩で独逸に留學することになつた。これも半ば私の希望のやうなものであつたから、私は喜び勇んで海外遊學の途に上つた。

先づ伯林に越ぎ、伯林大学の教を置いて、然るべき内科の教授の研究室に配置せられた時、たま／＼故國からの通信で、精神科をも併せて研究するやうにといふ、始めて侯爵家からの命令を受けた。内科と精神科とは接近した学科のやうであるから、素人には事の序とも考へられるのであるけれども、一定の留學期限のあるものにとつては、二鬼を逐ふことは不可能である。且つ精神科の大家として令名ある教授は伯林大学にはなく、これがためには、ハイデルベルヒかフランクフルトアン

マインへ籍を移さねばならないのだつた。伯林到着匆勿のことではあり、何となく億劫に思はれて、その手続きもどらざるにゐると、やがて追つ掛け、侯爵夫人から絶えて久しいたよりがあつた。

給費を受けて學問修業をして居る間は、さる御方とのみあつて、まるで雲の上の存在であつたから、侯爵夫人の手紙に接するといふやうなことは全くなかつたのである。

手紙には又意外なことが

認めてあつた。昨今侯爵には痴呆症の傾向が現はれ、折々興奮逆上することがある。別にこれといふ既往狂疾もないが、先々代あたり狂疾の当主があり、多分その遺傳ではなからうか。ともあれ現代醫學の粹をつくして、侯爵に最上の治療を加へるといふことが、当家にとつては緊迫した問題となつて居り、差し当り海外派遣のそこ許に最も希望が繋がれてゐる。

もとより当家では始めから、さうした計画でそこ許を海外に送つたのではなく、そこ許の研究に束縛を加へるの

は、小妹に於いて最も不本意である。けれどもこの突発的の不幸のために小妹は手を下げ、膝を屈してそこ許に頼み入るのである。どうか狂つた夫のため、又これに連れ添ふ妻の絶え入るばかりの悲しみをも察して、そこ許の研究をあらぬ方に曲げてほしい

と例によつて纏綿たる情緒をこめて書かれてあつた。侯爵異例の爲とあれば、一議にも及ぶことではない。永年の恩義を思へば、その位の

奉公をするのは当然であり、むしろその機會の來たことを満足にも思ふ程の次第であるから、私は直ぐ電報を打つて、承諾の旨を答へ、爾後一年間の期限を約して、専心その専門を叩くことにした。

私はハイデルベルヒのさる精神病院に在勤し、数多の狂人と共に丸一年間を暮した。殆ど夜の目も寝ずに治療研究に従事し、大体侯爵と同じ型の痴呆症についての手当処置法をも体得し得た。從來のリ

ングル氏液に私の考案による改良を加へ、これを患者の靜脈に注射するといふ方法であるが、この治療の結果は非常に好成績であつたので、私はこの研究の結果を持つて、一應歸國することにした。再び渡航するまでも、一時歸國して、つぶさに侯爵を診察する必要があつたのである。

私は横浜に着いて服部氏以下事務所の人々の出迎へを受ける時、その場で婦朝の報告を済ませ、殆ど旅装を解く暇もなく、北陸の侯爵本邸に赴いた。さうして侍医の人々の立合ひの下に侯爵を診察する

と、想像した以上に難症であることが判つた。私は一先づ東京に立ち歸り、今後の身の振り方をきめることにした。侯爵の治療が長期持久策をとることになれば、私も居を北陸の侯爵本邸の近くに定める必要があつた。そこで先づ母校の大学に論文を提出して學位を請求し、その肩書によつて北陸の縣立病院長となつて赴任した。他の病院に勤めて衣食する傍ら、侯爵の治療に従事するの、この際最も策を得たものと思はれた。

本邸には多年出入りの主治医始め多くの侍医が居り、これらがみな旧弊な頭の持主で、御典医の暗闘に終始してゐる有様であつた。かういふ事情が直ぐ判つたので、取敢へず學位を取つて、私の立場を自ら權威づけると共に、彼等が職を脅かされる懸念を持たないやう、邸外に衣食の道を作つたのであつた。私としては、そのやうなことをまで心を配り、所謂石橋を叩いて渡るやうにして、治療の万全を期したのであつた。(未完)

愉しき哉
頭痛なき人生

頭痛新薬
タミール錠

アメリカアイパリス・リ社
特許サニテール自動包装使用



藤天堂製薬



女性ばかりの

句評 川柳街 (下)

麻生 葎乃・武部 若菜
飯降 白香・太田 良子
藤本 茶々・麻生 梨里

恩のある家が吹雪にまだ見へる

白星

一月号川柳塔より

腹乃川巴と降りしきる吹雪の中に嘗ては道境の身を救うて呉れた人の家が見える。それは商川が公用の旅中の車窓から見たのであるか、それとも其家を訪ねての帰るさに、幾度も後を振り返って見るとの感じであるか、其点は此句を詠んだ人の想像にまかす事として下五字の「まだ見える」の二字が恩人の家と句主が立つている地点との間に相当の距離のある事を示していると同時に、句主の心に膨みつけられている謝恩の念の深さを物語っている。此句には川柳の第一要素である皮肉とか、諷刺が含まれては居ないが、川柳は又、或る時は人情、風土の写生であり、純情をぶちまける短歌の圧縮されたもの、民謡のエッセンスであると廣義に解釈している私は、多くの秀句の中から此句を推奨する事とした。單なる敘景句でありなが

ら、人情の一面を充分に描写し表現の上に一字のそつもない事を味つて頂きたいと思う。
白香川映画の一シーンが眼前に展開される。題材がクラシックでも、雰囲気も封建的なものがある。しかし人情のあり方は古今不変である。古くして新しい人情味に美しい人間の姿に涙がにじむいゝ句ですが、私は吹雪と別れといふ常套性が不服です。
茶々川丁度新派劇の舞台を思わせる大変綺麗な句です。人情味豊かな句ですが、あまりにもセンチメンタリズムですね。けれどもこの様な型の句も川柳の一つのあり方として推奨された葎乃先生のお言葉ももうなげけます。このせち辛い世の中で、醜態としないで、こうしたゆとりのある気持ちを持ちたいのです。この句にある思想は、昔も今も変りはありませんが、今頃の人はこの様な気持ちをあまりにも忘れてはいないでせうか。

然しこの句の情景、表現のし方がもう一つ私にはびつたり来ません。歌舞伎がだん／＼と現代から引離されようとしていると同じ様に、こゝ言う境地の見付けどころはもう手ぬるいのではないでせうか。同じ人情味、同じ情景においても、もつとピリツと来るやうな表現のし方はないものでせうか。
葎乃川作者が雪國の人であつて見れば恐らく実感句であるうか。すうらりとそのまゝを詠んだ川柳としては詩的な美しさを詠んだ川柳として、となく義理人情に缺けてゐる現在の社会に於て私達の胸を突くものがあります。

梨里川この句が主観的に詠まれてある以上、作者自身の実感句として見るべきではないかと思う。恩のある家が見えると言うことが吹雪と言う敘景によつて十二分に生きてゐる。これが十七音字によつて出来上つたものとは思えぬ程に作者の感情が盛り上つてゐるのには、この吹雪が作意的に持つて来たのではなく、只そのまゝ、事実であつたからだと思う。
吹雪の中に見える家に住む所の

主の温情と言ひ、作者の純情と言ひ、この一面の銀世界にも増して美しい心の持主を描いている。この句を映画とか舞台とか云う小さい限られた枠の中に入れて考へると、この句の持つ詩的な味合いも無くなるし、この句を貫いている純情さと言ふものを認めないことになる。それ故古いと言ふ言葉が出て来るのではないかと思う。それは評者も嘗て見た映画や芝居の一場面を連想したに過ぎないのであつて、この句自体はあくまで主観的であり、それ等のものと結び付けるべきものは持つていない、人情味の溢れた句であつて決してセンチではないと思う。
白香川映画や歌舞伎の一シーンだとみたと決してこの句の價値は減じないと思ひますけど、それだけ人情描写の普遍性とみてよいでせう。
若菜川馴れた表現、句意のもたらす美しさ、なだらかな何か心の琴線にふれるとこがあつて推奨句としての價値は動かないと思ひます。
二月号川柳塔より
花村
梨里川誇張法で生きている句、その意味で他の句と一寸変つてゐる

ので提出しました。過去に於ける血生臭い戦争は骨身に沁みて凝りている。皆んな平和を望んでいるにもかゝらず戦争は止まない。此処にも彼処にも戦は容赦なく起る平和を愛する者の瞳には「地球をば血でぬる／＼にする氣かや」と言う感じがする。「地球をば」の「をば」「する氣かや」の「かや」に一すひつかゝるのだが、も少しならかな言ひ方はないものかしらと思う。「をば」は字数を合せたために、わざ／＼余計な字を使つてゐるやうで、表現法が幼稚な感じもするし、又そのために却つて句意が強くなつてゐるとも言えるので、矢張りこれでよいのかも知れない。

夏子||血でぬる／＼といふ表現がいかに生々しくて、作者の詠まんとする所はよく解りますが、もう少し詠み方が無いものかしらと思ふ。平和を愛する者達の誰かが訴へ度い氣持。

茶々||お隣りて今にも爆発しそうな情勢にある事を考えますと、折角これまでに持直したのにと、ピク／＼させられます。もう戦争なんかこり／＼だよ、いゝ加減にしてくれよと言つている様な句です。……「かや」はこの句の場合大変効果的で、この一語で生臭い感じが救はれています。外のどの言葉も当はまりません。けれど、も全体の感じが誇張が過ぎて寒感がピンと来ない様にも思はれます。

一層刺戟的に聞える割合に下五が弱まつてきこちなさを救つています。國民等しく叫び度いこの十七字詩も修辭の無理が祟つて損な句となつて見えます。仮に上五を「世界中」で替えて見ましたら「をば」は無くなる代りにやはり借りものを感じがします。危機に立つて思はず洩れるこの歎息には多少の誇張法も役立っています。只血の文字が凄味を與えるのであつて、戰場經驗の男の方には寒感が出るのでせう。口に出た言葉がそのまゝ卒直に詠まれたのだと云う氣がいたします。

不朽洞句帖

麻生路郎

備前街道にて

旅はよし颯々として貨車が行く
失恋の耐になぐさむべくもなし
脱ぎすてた常着を見ても世帯じみ
ストリツパーになるわと妻にあなどられ
氣の抜けたビールのような補欠選

白香||もうかんにんして、といひたい句です。「血」といふ言葉と「ぬる／＼」といふ言葉と云い余りに生々しい。平和を愛する氣もちの表現もさることながら、私は何だか「血」そのもの、戦争そのものに怒を感じていられる作者の直接的表現として、生なそして思考のまじらぬ反射的な心持の表現として見たい。「平和を愛する」氣もちの表現にまでは間があ

りそうです。「する氣かや」の「かや」に何ともいへぬ恐いやうな笑があるやうな氣がします。
霞乃||「地球」といふ大物、「ぬる／＼」と云ふ大層な云いまわしがこの生命なので、ごんな言葉とも差し替えるわけにゆきません。「をば」が少々此句を稚拙に感じさせるのですが、最大物をあらわす「地球」といふ言葉に代る適切な四文字の名詞が見付からない限りは字数の点で「をば」はいない方がないでせう。然し此の「をば」はまんざら捨てたものでもなく、作者が誇張的に用いた

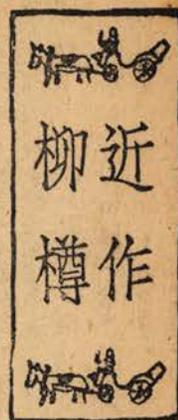
「地球」といふ言葉を更に認識させようとしてだめを押したことばであるとも受けとりたいたいと思つてです。
處女なんてあなたは古い要求ね
没食子
一月号川柳塔より
夏子||その時代々々により道徳といふものも又変つて行くものです。少し極端かも知れぬが所謂アプレゲールというものがさう云う

ものとすれば妻にこの一句につきまわっていると思ひます。
霞乃||結婚の第一條件として男が求めるものをあ、さり跳ねつけている、此会話体の技法がアプレ型の女性の態度を描くのに成功させています。
梨里||アプレゲールの女を掴んでいふやうに過ぎない。私は常々没食子さんの句が好きなんですがこの句もさすがに難のない句ではあるが没食子さんの句としては頂けない。没食子さんには他にもつと良い句があると思つたのですが……。

若菜||良子さま大変な句をお出しになりました。句としては全部口語体の淀みなく出来て、別に難点もございません。アプレ女を描いた主観句でいゝも卒の無い句をお見受けする没食子さんとして見劣りしても居らないのですが、問題は内容にあるので、私たちの研究句としては正直な所參つてしまいました。アプレも超アプレに属するもので、道徳と云うものは流行と一つには出来ません。そして同じ道徳でもこれは人間性の最も深刻な点にふれている限り、如何なる時代でもその觀念を保持したいと願うのです。單なるアプレゲールとして扱つてしまふには極端すぎはしないでせうか。女を描く意味に於て成功している句にはちがい無く、私が男だつたら何でもなく作つたかも知れませんが……
茶々||私も驚きました。こんな型の女があるといふ事は知つてい

で憎らしい程アプレ女の生體が現われていて顔そむけたくありません。そういう女達を非難している氣持がうかがわれます。若菜さんの云われる通り、やはり道徳は昔から一貫したものと云ひますので、こゝう句は女の私にはとても作れません。

白香||戦後私たちはあらゆるものから解放される機会に恵まれましたが(よかれあしかれ)そのうちでも封建思想から解放と、性道徳からの解放の一つのさげびとして時代色のあらはれたものとしてこの句を鑑賞することも出来ませんが、私はこの句の意味がはつきりつかめないのです。処女を要求する男性の封建的イデオロギーを罵倒しているのか、それとも処女なつてしまらないと女性自身がそれを貴重視しない新しい倫理観からの抗議であるのか、もしも前者であるとするれば純潔を求める男性こそつと純潔であるべきで、この純潔なものこそ眞の意味で純潔を要求したる資格と権利があるべきで、アプレゲールのくせに人並に、求める男の相変らずの横暴を皮肉つてゐるでせうし、もしも後者であるならば、恐ろしいモラルの世界が現出すると思ひます。かやうな考をいだく女性はいつどの時代にもないといへません。しかしそれが時代の思想として女性の考え方に影響を及ぼして恐ろしいとおもいます。その意味に於て没食子さんは実に女性の自覚をさげられたとも見えますし、又随分私たちを馬鹿にされたともとれて一寸憤懣します。



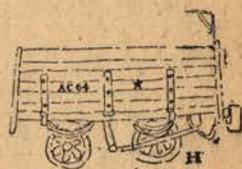
選郎路

春だなどしみる思ふもの忘れ 愛媛縣 村上 旭童
 逃したらつかめぬ恋と思ふ歳 同 同
 去るものは去つて港に浮くテープ 同 同
 この看護婦の指先も又冷たかり 同 同

別府にて

金もつて来いと別府の大旅館 同 同
 御詠歌のみんな楽しい顔をして 和歌山 浅川 桑南
 住職も胡座くみたい花の下 同 同
 酒の香が残る五月の魔法瓶 同 同
 敬老会氣持を汲んで数え年 同 同
 遂に世に落選候補として知られ 同 同
 母さんのブレイキわちどきさ 愛媛縣 渡辺 曉童
 二日程ひつそりとるる置薬 同 同
 肝を冷やすわ子の寝言なり 同 同
 前借のついで収入役も借り 同 同
 口髭にまだ夢がある守衛なり 堺市 丹波 太路
 焼残つたところで商店街になり 同 同
 ねんねこにバーマネットにボシ下駄 同 同
 看護婦の私服に逢へじお大切に 同 同
 有つ者の悲哀その名は富裕税 倉敷市 木村千代男
 老てその皮膚の抵抗無力なる 同 同
 あたら生命空瓶投げるやうに捨て 同 同
 つけこまれ不用ぬポマード買はさる 同 同
 大胆に女の方があかり消し布 畦 純香
 八十でぼつくり死んで羨まれ 同 同
 生佛さまに貞操のぞまれる 同 同

妻の留守拭掃除などやつて見る 同
 その中で司会者丈けは酔つて居ず 今治市 長野 文庫
 二三ベン投げとばされたエキストラ 同
 野球部の予算超過は硝子代 同
 代議士へ改札一寸改まり 同
 懇親会事前運動とは言わず 愛媛縣 米沢 曉明
 結局は一票欲しい御挨拶 同
 その中で一人助かる運のよき 同
 久しぶり友も老眼鏡を持ち 同
 饒舌キスするひまもなかりけり 廣島縣 黒本 芳泉
 歯がゆさは随いて来いとも来るを 同
 青春に悔なし君を得たる今日 同
 小細工の好きな男の薄い唇 同
 山賊のような生活もして還り 貝塚市 津田 千舟
 子の出来ぬ手術するとは淋しいね 同
 リンタクを待たしておいて肛門科 同
 スプリングゴートを伊達に持つ見舞 同
 阿呆らしい追ひ込みなど止してくれ 荒尾市 蒲原 元祿
 寝込んだを聞けば落ち込む因と言う 同
 大風一過落選のピラが散り 同
 呼び鈴をすまなく押せば牌の音 同
 労資共一應花見はすませとき 岡山縣 水谷 谷水
 瘦たくも肥えたくもなし妻の欲 同
 傘にまで女敵意の眼を燃し 同
 札束え裸にでもなる妓の目つき 同
 葬式の花環に競ふ候補の名 東京都 松井 蛙声
 公僕と言ふ顔でないヒゲが伸び 同
 看護婦も試験に近い静かな灯 同
 老ひぬれば孫のプランコゆする役 同
 親友ではあるが貸金忘れられず 岡山縣 水田 草骨
 親の金で親の土産を買つてくる 同
 御恩は忘れませんと恋が逃げ 同



雜筆

春秋

「ホテル」を選して

吉田 水車

嚴選のつもりではなかつたが、全没の方が大分出たのは如何にも心苦しい次第である。
 物心両面から二重三重の負担がまげられないのが、我々の宿命のようなものであつて、今度の課題「ホテル」にしても厭せば旅館である。が我々の普通の概念からすると、旅館をハイカラに言うて「ホテル」と呼ぶのであるけれど、厳密にすれば旅館は旅館で、ホテルはあくまでホテルである。ホテル式旅館はあつても旅館式ホテルと言ふものはない。ホテルの定義を私観的に言ふと、建物としては本格的な洋式で、玄関に車寄せがあり、豪華なロビーと食堂を持ち、部屋はバス付きで各部室に施錠する事勿論で、靴も玄関ではぬがなしい食事も各自が勝手に食堂へ行つて済まし、全く宿泊本位のビジネスライクなものであると思ふ。そこへ行くと日本の旅館はある場合は料亭のような役割を持つ事すらある。ホテルと旅館の共通点は宿泊そのものと言へる。
 さて今度の課題に対する選句結果は其だ少敷でしかないが、我々の生活に於て大いに関連ありそうで、しかも身近かにないのが、他の多くの作句から受けた感じである。一生の内にはすいぶん旅行される人もあ

老いらくの恋はお金をやつただけ
 迷子へ弁当分けるミスボリス 長崎市 同
 封切らぬ俸給渡すむつまじさ 同 石井 青馬
 旅人は阿蘭陀坂の雨にぬれ 同 同
 小糠雨オランダ坂に人まつ娘 同 同
 手土産を少年正しく評價する 大阪市 同
 愚痴多く女の慾は世帯じみ 同 山本 葉光
 自惚れの強さ年増の働け氣 同 同
 月給も安いし恋も出来ぬたち 大阪市 同
 あけて見りやノックをすべきとつた 同 秀雄改め 三木 泡起
 五六度も落ちたに政治の何処がよい 同 同
 赤い羽根去年の服の胸にあり 東京都 梶本 梅香
 嫁つてやるのは氣の強い友の言葉 同 同
 運勢に甘えて白髪ふえたのみ 同 同
 愛人に手錠はめさせアブレなり 日塚市 同
 母の事前科十犯ほろりとし 同 同
 降りる迄横文字同じ頁なり 同 同
 車窓から見えた故郷は二三分 大阪市 同
 車内掃く待つ間もさかハネムーン 同 同
 鈍感なあゝ娘が君に惚れてたに 同 同
 失業へ助ける神の手も伸びて 東京都 石居 高志
 弁士堂々として候補者が小ぢぢえ 同 同
 月給の出るを待たない櫻なり 同 同
 夜櫻に済まない白衣のアコーデオン 長崎市 同
 娘十五母のむかしにふれたがり 同 同
 尼一人やはり女の暮し様 同 同
 公休日家でも仕事あてがはれ 岡山縣 同
 戦後派と言ふには地味な恋であり 同 同
 二次会の果は時計を置いて去に 同 同
 歌になり絵になり谷の水車 愛媛縣 同
 郷愁はガラスに母を指文字 同 同
 受話機え眞つ先に咳が入つてき 同 同

うた、寝の首は夫へ持つて行き 大牟田 新谷 風浪
 花見宴此処も同じ歌で飲み 同 同
 此の人も待つ人が来ぬらしい様 同 同
 天罰かボスの花見へ雨が降り 兵庫縣 同
 織姫と言はれ寄宿に寒う寝る 同 同
 無料でも公会堂の固い椅子 同 同
 この港から父ちやんは船出した 貝塚市 同
 給仕にも殿がついてる給料日 同 同
 花見かど云つて夫は髻を抜き 同 同
 末つ子はお嫁に行つてまで甘え 熊本縣 同
 手錠ガチャリスリには惜しい女 同 同
 モザイクのあれが百万両の家 同 同
 七轉びそれなりけりの棺へ入り 日塚市 同
 借金はお茶で体よくことはられ 同 同
 発車まで新婦無口に乗つて居り 同 同
 老の背に孫の重さがお嬉し 石川縣 同
 むつつりと火鉢に炭づくだけの妻 同 同
 今日もまた無事に勤める靴すべり 同 同
 ストリップの看板実物大に書き 岡山縣 同
 漁夫の利を得んと共產党も起ち 同 同
 親類を足場に京を見物し 同 同
 どこ迄も恋の砂浜繞くなり 愛媛縣 同
 折箱も乳房もへこむ満員車 同 同
 カーネーション震わしタイラウツツ 同 同
 戸を開けりや会いさもない奴が居る 石川縣 同
 コソ泥と云へど十万二十万 同 同
 俺丈が貧乏してる様に見え 同 同
 嘘つくも上手都会の子に育ち 貝塚市 同
 春の池逆さの影も二人連 同 同
 轉勤へ深入りし過ぎた恋があり 同 同
 三人になつて平和な日が続き 岡山市 同
 ライバルの花を提げなが氣に掛り 同 同

ろうし、又せいぐ遠足会位でほとんど旅館を必要とするような機会をもたない方々も亦沢山居られる筈である。旅行家としてホテルを利用される人々は上記のようなホテルの意義から言つて、おもしろい川柳を見つける事は困難であるうし、あまりホテル(旅館)に用ひない人々がものされた句は類想的になりほとんど定石のような句ばかりになるのもやむを得ぬ事である。たへば、ホテルと恋愛、まじめなものまじめなもの、これが八十パーセントを占めて居た。我々日本人の二重生活(主として文字から来る)は今後益々深刻になるだろうから、文字の持つ主体の研究と言う負担もいよいよ其度合が多くなるから、なか／＼作句も骨が折れる事であると思ふ。

選句標準はそれが板ばりのガタビシでもイス、ベッド式で靴なりで出入り出来る、いわゆるホテルも一應廣義のホテルとしていたゞいた。

女性と笑

麻生 葭乃

「女は男に比べて笑ふ事が少ない。これはコルセットが横隔膜の運動を妨げるからである。然し、締め付けたコルセットの時代が過ぎ去つた今日でも、依然として女は男よりも笑はないのであるから、女の笑はない理由がハッキリせぬ」と云ふ記事がインターナショナル・ダイセストにあつた。

コルセットの圧迫が外人の女に笑ひを少なくする原因となるならば、日本の女は着物を着るのに、先づ第一にベテイコートの紐を締める。肌着に紐、長襦袢に紐、着物に腰紐、そして胸のあたりは伊達巻でギュツト締める。更に硬着な厚板帯を助手の手をかりて出来るだけきつく締めるのである。

嫁かぬ氣の見合素顔で濟せとき
花びらが浮いたで鯉は春と知る 大車田 同 小川 青泡
金ためる事未亡人面白い 同 同
からたちの垣根も青く少女病む 同 同
教へ兒の欲待に長壽思ひ立ち 岡山縣 岡田 夜潮
定刻に一人も居ない火鉢なり 同 同

マ元帥帶國

日本を機上の元帥かへりみる 同 同
科学者も遂に家出を占て貰ひ 具塚市 清水 羅洲
容姿佳く未婚財有り年四〇 同 同
おたいこの結びも知らず母となり 同 同
奥さんにどうやら丸められたらし 岡山縣 小林 鳴子
金なしとどみてあつさりとふらけり 同 同
着ぶくれたホツクは母の手を借りて 出雲市 久家代任男
二号さえ金に詰つた値切りよう 同 同
お守に五円拾円式拾円兵庫縣 赤木 紅山
角瓶の中味は別の味をつぎ 同 同
いや〜が出来て近所へ借りられる 吳市 松永四季無
胸を病む息子へギターアコーデイオン 同 同
まけて賣るようになり三十女嫁き 具塚市 上坂 朱人
このベッドの上で死ぬのかと思ひ 同 同
病床へ一年生の子の便り 具塚市 武安 嘉彦
院長廻診警蹕もかゝりそう 同 同
親の氣と別に娘のハイヒール 愛媛縣 堀内 曉風
古本の整理それなつかしみ 同 同
アキ瓶が眠むたい音で轉がつた 具塚市 河楊 梵鐘
妻帯もせずホテルで世を送り 同 同
おもちゃ屋へ寄る楽しみな父となり 具塚市 宮本 甲馬
下駄箱も二階へ坐る暮向き 同 同
嘘ぐらい言ふてやりくりせよ 言ふ 宮崎市 野口卯之助
働きのにぶい男の理窟聞く 同 同
やきめしへ夫が替るフライパン 具塚市 多炭 若柳

良心を賣つたを云はぬ立志傳 同 同
新入学帽子かぶつたまゝ寝入り 高知市 松下一徹郎
入学の当時戻りは走り込み 同 同
頭だけ社長と同じ型に禿げ 出雲市 原 独仙
防空壕で生れた子ですランドセル 同 同
ランドセル精一杯の女親光市 加川 靖郎
花見客まだあきたらずネオンの灯 同 同
やましきのない生活に子沢山 大阪府 青柳扇子仙
刻々と過去つくる音置時計 同 同
街路樹の影に子供の鬧遊び 愛知縣 松尾 北雷
街路樹にもたれヒロポン患者なり 同 同
それにしても目丈けは恐入つて 高田市 岩垣日本村
二十一数学的な理窟云ふ 同 同
榮養の献立猫の分がなし 具塚市 総谷天望子
卒業の右総代は露路に住み 同 同
上役と喧嘩がしたい花見酒 大阪府 上島きはち
ネクタイもくたびれてゐる倦怠期 同 同
差し押へ九官馬鹿と叫んだり 石川縣 那谷 光郎
二三日は無言の行も倦怠期 同 同
孝行をする借金を断られ 鳥取市 森本法泉子
春の日を貸金とりに行く仕事 同 同
噂に聞けば僕は私生子らし 岡山縣 末房 至孝
春夏秋冬いつもネクタイは同じ 同 同
手を引いて負ふて特價の列にいる 大阪市 藤本 小柳
嬖曳の課長に逢つた戎橋 同 同
女席にも灰皿がありPTA 岡山縣 片山 百郎
役得がばれて左遷の荷を縛り 同 同
これしきの風にと赤銅色の肌 和歌山 岡崎 泰三
天業のエネルギーをば持てあまし 同 同
一生をスタンドの隅に狭く生き 下関市 加藤 司楼
沈黙数時間名人の駒進み 同 同
助教授と云う肩書へ信頼し 大阪市 佐野 牛歩
祖母、母、娘、女世帯のしめつけ 同 同

から、男よりも遙かに笑ひが少ない筈で
ある。
然るに日本の女は何でもない事に笑ふ。
時としては、笑つてはいけない時にでも笑
ふ事がある。かういふ彼女の相違は何がさ
うさせたのであ
らうか。外國の
女は紹介されな
い男に対しては
決して口を閉か
ない。勿論通り
がかりの人に言
葉をかけられて
も、それが未知
の人であれば、
ほゝむ事はないやうである。又さうする
事が礼儀でもあるかの様に見受けられる。
殊に未婚の女はかくして彼女の誇りを尊重
し、且つ大切にかばうてゐるのである。男
もさうした態度の女性の自尊心を傷けない
事が常識となつてゐる。従つて外國の女は
幼い時から、さういふ風に育てられて来た
ので、ほゝむみの範囲がせびめられてゐる
眠である。
日本の女は少女時代から「女は愛嬌がな
くてはいけない」と云つて育てられて來
た。此の金言の服用があんまり効き過ぎ
て、時と場所とのけちめなく、唯ほゝむん
でさへ居れば無難であるときへ考へられて
來た。
笑は、ほゝむみが強調されて起る筋肉の
反應作用であるとすれば、日本の女が男よ
りもよく笑ふのは當然の事であり、彼我共
に女性に與へられた笑ひの量の相違は傳統
的な訓育によるものであると私は思ふ。



九州の旅

弘津柳慶

毎年きまつたようにこゝ十年余り、一月

明方の湯壺一杯伸びてみる 岡山縣 池田 古心
 花見かと尋ねるだけの暮し向き 同 齊藤 一笑
 盛り場へ共に孤獨もついて来た 貝塚市
 豆チム御飯ですよでノーゲーム 同
 若さのみ頼りの綱として暮し 倉敷市 野田素身郎
 日焼した腕で男という誇り 同
 病状をきかれて嘘が言えぬ朝 愛媛縣 村上 和子
 憂うつを飲むに手酌がせつなくて 同
 兎に角も妻をおさえて母は無事 大坂市 長田 塗杖
 灰皿の向ふに求職者はちさく 同
 早合点女のほうがえらかつた 今治市 柴田 青雨
 子の夢は小鶴、河上、別当か 同
 法律も知らずで同権言つてゐる 出雲市 沢田 吐泉
 向ひ雨素足ですばんだ傘が行く 同
 産制を論じ合つて、嫁がなし 米子市 松本 水鏡
 家中が困る雨傘貸してやり 同
 一票の話をもつて行き 米子市 藤岡 鱒三
 金持たせたら実には何処か使ひ 同
 名工の作だというは何処か缺げ 徳島縣 廣瀬志津雄
 君なんか井の中の蛙といふこと 同
 丸山の宵を昔のまゝの雨 長崎市 山崎 虹介
 寄り添えば阿蘭陀坂の雨靜か 同
 寓と書く隣は朝風呂焚く煙 大坂市 石田 春峰
 お見舞は布圍のあつさ見て帰る 同
 男装も女にかえる蚊帳の中 米子市 小西 雄々
 御機嫌は風呂から論もれてくる 同
 浅はかなトリツク旦那に見破られ 岡山市 平岩 作州
 頃合いに妬げとおしへる主婦の友 同
 手放して泣きたい或る日を花散れり 横浜市 梶田 智水
 たむむれる神の暗示を掌に受けし 同
 新入生親の希望を背にかろい 熊本縣 岡本 昇月
 青春の意氣をビールの泡に見る 同
 約束も忘れた様に嫁にゆき 岡山縣 浜野 奇童
 労働の恋しい暇な日が続き 同
 ロマンもなくなり母となり祖母となり 岡山縣 河島 露外

子の母になつて夫の妻でなく 同
 西鶴を読む氣になつて春うらゝ 熊本縣 岡村 秋番
 さんだるを履いたまんまの家出です 同
 交代の看護婦ベイ／＼云つて去に 大坂市 池戸 桃村
 残飯に今日も雀の夫婦来る 同
 おごなし抗議の方がよくこたえ 大坂市 西川 惠風
 アイスクリームおごりまはる汽車の旅 大坂市 中谷葉榮子
 赤ちやんの名付に電話帳を出し 吹田市 橋本 幸男
 修養をつめとは俺を馬鹿にして 大坂市 横田 方眼
 卒直に言えば云うたで煙たがり 貝塚市 中尾 彬光
 我が金子の様に車掌は紙幣を読み 大坂市 森本黒天子
 親だけが氣をもんでゐる二十八 出雲市 原 峯雲
 女房よ死ぬなとむらゐ出来ないぞ 奈良縣 平井 良兒
 本山は何事も無く出開帳 愛知縣 平岩寛太郎
 ガラス越し顔もまぶしき娘さん 岩田 尙人
 雑壇で小供の寝床隅に敷き 愛知縣 津川 竹坊
 金ヘンの町でどかんと席が空き 大坂市 貝塚谷恒良
 日蓮の眼玉が光る出開帳 愛知縣 太田 劍坊
 宿直は飲んじやいけぬ規定です 鳥取市 岡嶋 芳道
 食う丈は食うても病臥ぬけきれず 岡山縣 田中 敬貢
 迷い子を背負つて帰るパトロール 貝塚市 齋藤 一蝶
 出開帖本山の危機人を知る 愛知縣 尾崎 久平
 ほれてゐる弱身が嘘も聞いている 貝塚市 荳原 一人
 子供の昨日の倍も金が要り 岡山縣 大家 笑平
 したつばはまごころ丈で酒をくみ 熊本縣 花岡 英子
 死んだ娘はきれいな眼をしてた 岡山縣 池田 昌子
 答弁に馴れてこの頃委員長 出雲市 多丸聖一路
 速報に歓喜んでゐる泣いてゐる 出雲市 石橋 齋光
 ヒスの妻地震の様な音を立て 大坂市 小島 捨石
 研究に余念なき夫もの足りず 大坂市 東 喜久堂
 安靜の窓へ選挙が怒鳴りに来 貝塚市 芝 無骨
 入獄が肩書になる選挙戦 貝塚市 太田 貧坊
 春雨と云いたいけれどトタン屋根 岡山縣 石部 富坊

末から、二月始頃に四十度からの熱を出して、四、五日寝る事になって、今年こそはと、夏には暇ある事に、海へ飛び込んで、体を鍛えましたがやはり駄目で、又々二月五日から熱四十度二分で、意識はハッキリしているのに、寒気がして、三日程寝込ました。弟の養子縁組があり、挙式に参列する予定でしたが出席出来ず、昨年も、路郎師の句碑建立に出席する予定の所、発熱でついには缺席、いつもいつも、肝心の時に熱を出して、後で悔しがり、一種のマラリヤではないかと、自己診断している。八日から出勤して、十二日から一週間福岡、佐世保、長崎、雲仙、鳥原、熊本、鹿兒島、阿蘇、別府と、一巡して帰宅した。花には少々早かつたが、日頃の心掛がよかつたせいか、路郎師のように行く所々晴々で、汽車に乗っている時、バラ／＼と雨になつた事二回あつたが、下車の際は晴天となつた。

長崎

今日もお蝶夫人は庭へ立ち
 輪タクは心得預
 でベタル踏み

温泉宿
 温泉の三味は金
 へん糸へんか
 食前食後朝立せ
 わしく温泉につ
 かり

鹿兒島
 櫻島車窓へ名残
 まだつきす
 社長まで鹿兒島
 弁で應對し
 高千穂

天臨のいわれ聞
 きつゝ仰いで見

1 姫
 2 太郎
 3 c.c.c. サンデー

ためて育てる旅に立
 確実な避妊薬サンデー！






川柳加藤蛇の目紋 (一)

阿達 義雄

(一) 加藤氏と蛇の目紋

天保武鑑によると、諸侯の

中に蛇の目紋を其の家紋としてゐた者としては、六万石伊予喜多郡大洲城の加藤遠江守泰幹、一万石大洲内分在所新谷の加藤大減少輔泰理、及び加藤左馬介藤原嘉明の後裔たる加藤能登守明邦(二万五千石、居城江州甲賀郡水口)などくらゐのものである。前二者は兎に角として、加藤能登守は奥洲会津四十万石に封ぜられた者の子孫であること考へてみると、此の頃に於ける加藤氏は勢甚だ振はなかつたと言はなければならぬ

之は加藤氏の主立つた者が豊臣氏の遺臣として警戒され、知行取り潰し又は削減の憂目をみた結果であらう。従つて、川柳や狂句に於ける紋章句蛇の目を検討してみても、江戸時代に於ける加藤氏は殆ど詠まれて居らず、それは豊臣時代の加藤氏か或は

蛇の目を紋でない他のものに關係づけてゐるのが一般である。

蛇の目紋といふのは分り易く言へば、白地に書いたのを見るに二重丸と同じ様な図柄であつて、竹の子の輪切り又は竹輪の切口みたいな紋である。

竹の子の輪切りを紋に虎之助

(柳多留一五七編)

虎之助は加藤清正の幼名。

唐人は平の竹輪をくひのこし

(三三編)

こゝでの唐人とは明人或は朝鮮人のことで、文祿の役で、清正が彼の地を荒れ廻つてから以來といふものは、加藤清正の蛇の目紋を連想させる物は、食ひ残しの竹輪すらも嫌はれてゐるといふのである。

明和元年の方向合に「はなやかな事」の前の句を題として附けた句に、

蛇の目をばやつこはしんで紋に付け(明和元年宮印三枚目ウラ)といふのがある。「しん」は

「眞」で「草書」の「草」に對する言葉である。奴と言へば、江戸時代には大抵上着の背に釘抜の大紋をつけてゐた。釘抜の紋といふのは、の形で漢字の楷書の様に角張つて居るのに對し、加藤蛇の目紋は之を草書に崩した様に丸みを帯びてゐる。「華やかな事」に附けたのは祭などに、此の釘抜大紋の絆天を着て威勢よく活躍してゐるのを言つたものであらう。この解の傍証として挙げられて置きたい句に

有馬家は加藤の紋を眞で書き

(天保二年有引権)

といふのがある。「武鑑」で見ると、有馬侯の紋には、三巴や五三桐の外に釘貫の紋が示されてゐる。

(二) 賤ヶ嶽七本槍と加藤清正

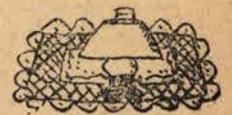
さて、江戸時代になつてからは、蛇の目と言つても傘や「すし」などの名に冠せられて、さつぱり幅も利かなくなつたのではあるが、天正十一年の賤ヶ嶽の合戦の頃は陸々たる勢の蛇の目であつた。この一戦に於て流石の柴田勝家も全く息の根を止められて了つたのである。

七本の中で丈夫な蛇の目傘

(九七編)

七本の中に二本は蛇の目也

(六一編)



不朽の洞 喫煙室

ジュー云を事いたひ云 (順着到)

黒

須崎豆秋

二十五才で亡くなつた、天才極口一葉が「たけくらべ」を発表して世間を驚ろかしたとき「早稲田文学」がその名文にあやかるやうに「たけくらべ」を黒焼にして作家に食べさせては、どうかと書いた。とかく理窟の多い現今の柳界でも、作品でリードするやうな天才作家が現はれ、黒焼にして食べさせて貰いたい様な名句を見せて欲しいものだ。

娛句樂さんへ 往く道

水谷鮎美

三宮駅にて

駅員は「さあのみや、さあのみや」と云ふてくれるがちよつとも酒の二合瓶を持つて来てくれない

酒墓場

車窓から見える小山が墓地になつてゐるのを数へると十ヶ所余りある豆秋「川柳家はかりの墓地、しらえたらえ、な」貴山「そやけぞ酒あらへん」鮎美「墓前の花筒に酒入れて花挿して飲んだら好い」

即興似顔詩

福田妄夢

1 須崎豆秋さん

すてきな さゝやきを きみのこゝろへ とゞけるひと うつくしい しんらつな ゆかいな句を うたうひと

2 水谷鮎美さん みたま・みあかし・みかつき つばき・つゆ・つき たましい・たぬき・たちみ になげん・によらいさま あかり・あさ・あいじん ゆき・ゆめ・ゆうぐれ……そして みづたにあゆみさま

不朽洞

会から

▼山根白星氏 (高岡市)は 青森縣え長期 出張をされ、四月末引揚の予定が六月末まで滞在されることになつたと同時に、青森縣大三沢町古間木、つたや旅館に移られた ▼木下圓王氏(大阪市)は四月十日頃から病臥、今度ば腸を悪くして衰弱が甚しいとのこと切に静養を祈る ▼佐野ト占氏(八代市)は四月廿五日に人吉の入吉旅館から「冷汗を出してスリルの川下り」の句信を寄せられた四月一パイ滞

七本で壱本つよい蛇の目傘

(一三〇編)

徳川の世であるから蛇の目傘に託して詠んでゐるもの、この七本は実は賤ヶ嶽の七本槍である。賤ヶ嶽七本槍として勇名をはせた面々は、加藤清正・福島正則・片桐且元・平野長春・脇坂安治・加藤嘉明・糟屋武則で、この七本槍の二本は蛇の目紋の加藤氏である。

この七本槍の家も、徳川の目の上の瘤であつたと見えて、後になると、みなそれぞれ取潰しの憂き目を見てゐる。第一に、藝州廣島の四十九万八千石の福島正則は元和五年六月に、津軽四万五千石に左遷されたかと思ふと忽ち取潰し。又、加藤清正の子の忠廣は肥後の熊本五十二万を嗣いだもの、寛永九年五月に一万石にされ出羽へ遷されたと思つたら之も亦お取潰しに逢ひ、加藤嘉明は会津若松で四十万石の太守となつたが、その子式部少輔明成の時、(寛永二十年五月)所領全部没收され、後、明成の子明友にだけは二万五千石を與へて、どうやら蛇の目紋を存続させてゐる。

和の虎にばかり蛇の目も齒は立たず (一五四編)

朝鮮の虎には動じなかつた清正も、寅年生れの家康(和

の虎)だけは、いさゝか苦手どころか、全くの鬼門といふべく、自分は毒饅頭を食はせられたばかりでなく、子孫も一藩取潰しの厄に遭つてゐる。一ツ日は軍師蛇の日は勇士なり

(八一編)

一ツ目は甲斐の武田家の軍師、めつちちで有名な山本勘助である。

柳交人暑中廣告を募る

是非一ト口は!

★一と口金百圓

幾日でも申込まれたい一ト口分の原稿は住所と姓と雅号程度。

活字指定はおまかせ乞ふ一ト口分は五分の一段組三行。

★原稿締切は六月末日限

★廣告料は前金のこと

川柳雜誌社

次に文祿の役關係の加藤清正を蛇の目紋で表現した句を一括して示してみよう。

八道を一呑にする蛇の目也 (三九編)

異國迄灰汁で洗つた蛇の目也 (五二編)

蔚山の籠城蛇の目ひからかし (六六編)

日本の蛇の目唐までにらみつけ (五〇編)

朝鮮も蛇の目の傘でおつべしよ (一〇九編)

虎蛇の目附ける異國の初めぼり (八五編)

蛇の目と四ツ目唐人と女房泣き (一三九編)

平和國家にとつては、余り香しい句ではないから一々詳説をせず、羅列しただけである。ただ、最後の句の「四ツ目」とは兩國の四ツ目屋で賣つた長命丸といふ女を惱殺する媚薬のことである。

京都の豊國神社の附近に耳塚と称する塚があつた。之は朝鮮の役に、諸將士が討ち取つた敵の耳を切り取り之を塩漬にして秀吉の檢分に供したのを、秀吉が命じて埋めさせ供養したものであるといふ。

耳塚は土産蛇の目は置きみやげ (九〇編)

耳俵蛇の目印の送り狀 (六四編)

「蛇の目は置土産」の意味は人によつては色々に解されるだらう。

尚、次の句も清正の事跡に基づいて作つた句ではないかと思ふ。

だんづかをついてくりやうと蛇の目が出(明和三年・仁印七枚目)

この句の前句は「かくれ社すれく」となつてゐる。

在とのこと▼須崎豆秋氏(大阪市)は四月廿二日に娛句樂居に於ける路郎句碑除幕式に列し、一泊、社用で岡山、松江に出張廿五日夜帰阪され、廿八日には社の運動会で琵琶湖の島巡りをされた▼麻生路郎師は路郎第四句碑除幕式のため四月廿一日午後五時三十分大阪発で西下、十時すぎ岡山縣吉永町福満大森親句樂居に落ちつき、翌日の除幕式並に句会にのぞまれ翌廿三日に帰阪された▼延永忠美氏(岡山市)は娛句樂居の路郎師句碑建立記念川柳大会後の祝宴がありはつたので四月廿二日の当夜満年、十九平、天竜、茶々の諸氏と終列車に乗り遅れ和氣まで車を飛ばし、準急に乗つてやつと帰宅されたのこと▼北川春葉博士(兵庫縣)も同大会に出席、汽車に乗遅れ娛句樂居に舞い戻り、豆秋氏と枕を並べて一泊▼本会から路郎師句碑除幕式に参列した会員は娛句樂、苑女、久米雄、縁雨、飜美、正則、春葉、九坡、風來子、淑郎、満年、鉄兒、茶々、十九平、迷窓、忠美の諸氏であつた▼丸山弓削平氏(岡山縣)は四月に弓削町議職と共に弓削町公民館文化部長に就任された▼亀山晴峯氏(大阪市)は五月六日夜、社用で東上▼須崎

豆秋氏(大阪市)は五月六日夜、社用で東上▼竹田若穂氏(大阪市)は結婚式参列のため五月六日晚の天保山発で郷里徳島縣川内村へ、▼山路閑古氏は東京都大田区南郷二ノ二六へ轉居▼有働芳仙氏は熊本縣鹿志郡松尾村平山松尾北小学校へ移轉された▼松江梅里氏の町名が大田市阿倍野区松崎町三ノ二四と改称▼岸南柳氏の町名が阿倍野区天王寺町北一丁目十八番地と改称▼山路閑古氏(東京都)は五月十日及廿四日の〇時十五分にNHK第二放送で川柳評を放送された▼故高島米峰先生の「米峰回顧談」が近く刊行される特價一五〇円、既刊「高島米峰自敘傳」特價二〇〇円と二册(前金)なれば三〇〇円、東京都豊島区長崎二ノ一四學風書院▼正本水客氏(大阪市)は近來職務上の出張が多いので本會理事を辞任された▼間島青丹子氏(天王寺鉄道管理局)は正本水客氏理事辞任の補欠として路郎師推薦により理事に就任された。

新会員紹介

五月

大倉 四奈氏(岡山市) 正

山田 季贊氏(廣島縣) 正

淵年氏推薦 春葉氏推薦

院長 牟田 晋三 郎(哲)

耳鼻咽喉科 牟田病院

大阪市南区長堀橋交又点西、電話船場五〇〇番



詠史川柳

につぼん (9)

戸田古方

封建社會(4)

(三十一) 秀吉の視野(十六世紀)
色々の見方もあるが秀吉の視野は決して廣くはなかつた。利を得るには道があるにもかゝらず、その道を抜きにして結果だけ追つたことが彼の悲劇を産んだのである。から、うた會呂利へ笑う日もありき

教訓もそうでないのも太閤記死の床で太閤何も考へず

(三十二) 徳川幕府(十七世紀)

秀吉の刀狩と檢地のあとをうけて再編成された封建制度の上にとつかり腰をすえたのが徳川氏、家康は自分中心に考へての事であるが無理をしないどころに秀吉より一段の進歩がある。

御恩願ともいわず頂戴仕る

人質の味も彦左は生きかされる直參をよせては人生論にふれ孫の教よみ出なうてよみ直し講談になる家康の地味すぎる

(三十三) 法 度(十七世紀)

経済統制のみを統制といふのではない。大名から百姓まで準戦体にしぼりつけて、それを色あげたのが家光であ

つた。こゝまでくると可成無理に見えることも無理に思へなくなる。

急用へ手形の人相ちとちがい大井川朝顔だけの事なし

武家法度雨もりしほしほつとか

れいつの間にか消えたか武鑑にも見え

(三十四) 鎖 國(十七世紀)

鎖國の原因は領土侵略の危険、封建制崩壊の危険、金流出の危険と数えることが出来るが、國よりも家を重んじた武士階級のエゴイズムによるものであり、視野拡大の不足より来る怯懦であつた。

殉教を解しかれたたま、刺す穂先うつかりといふた蘭語でひか、

(三十五) 太 平(十七世紀)

元和偃武以来、対外戦もなければ、島原の乱以外に内戦もなく、二百五十年以上の平和がつづく、これは徳川氏の強力な絶対権によるものであつて、世界でも珍らしいものの一つである。だが町人対

武士、武士対百姓の経済戦は暗流となつて絶ゆることもない。

本丸の太鼓が無事な音でなり

荷捌がすめば大門くぐる肚

嗚呼忠臣楠氏とかいた旅日記

(三十六) 士農工商(十七世紀)

武士の時代だから武士が正座につくのは当然として、百姓はお百姓さまであり、食料の供給者であるが例の「生かさず殺さす」の政策のために此間全く下積をつづけた。

罪は罪直訴は直訴きとどけ

助聊が又も田植の邪魔をする

種米に手かと、きそつて飢えせま

町人へ一手ぐらいは指南する

(三十七) 町 人(十七世紀)

武士も百姓も貨幣経済ともなれば、自給自足にも限度あり、次第次第に富貴の身となる町人の喰ひもの、眞綿で首をしめられるように細つていつたのは武士であつた。

少々は高利もやつている家老

殿様の方前借になれ給い

ちよんまげの障子にうつる堀江の灯

(三十八) 上方と江戸(十七世紀)

江戸時代は江戸文化といふものゝ、江戸は東辺の寒村でしかなくつた歴史からして、時代のなやかな幕は西に開き享保元祿と花ひらく。

西鶴に親しみ大阪古図を買う

三十石ごこの櫻か屋根ののせ

西國へ土産黄表紙なども入れ

(三十九) 江戸趣味(十八世紀)

人文地理で大切な環境論がものをいふ、宵越しの金をつかはないのも、はぎれのいゝ江戸の言葉もあの廣々とした

武藏野から生れたものであり黒々とした土をまき上げる空つ風の申し子であつた。

御堀の鯉ははては辻斬り鶯かせ

叱られていよう贅六かしこま

り

氣前よ、棒引にする江戸生れ

(四十) 浪人と俠客(十七世紀)

歴史でいう浪人は必ずしも武士にかざらないが、江戸時



静 動

▼本社句会
は五月五日
午後六時か
ら大空文化
会館三階で

開催▼川雑京都支部復活青葉句会

が五月三日午後一時から眞如堂本

坊眞正極樂寺で開催盛會裡に四時

閉會五時から同庭園内で懇親宴を

開く▼川雑大阪南支部句会は五月

十六日午後六時から阿倍王子神

社で開催▼大阪通信病院鳥ヶ辻川

柳甲会は五月廿日午前十時から六

へ吟行▼一路会句会は五月十二日

午後二時から高島屋飯田株式会社

で開催▼あかれ川柳会(奈良縣五

條)で五月十三日午後一時から

講御堂に於て五條川柳大会を開催

▼南区医師會文化部川柳同好会は

五月廿二日午後七時から春路居で

開催▼南海電鉄川柳会は五月廿六

日午後一時から高師ノ浜海岸で開

催▼体温川柳會(貝塚市)は五月十

九日午後二時から千石莊に於て開

催、以上路郎主幹出席▼川雑北大

阪支部句会は五月廿一日午後五時

半から梅田O.S劇場裏筋東牛丁正

代のは武士の碌ばなれを指す様である。大阪の陣も島原の乱も由井正雪も浪人騒動である。自立した町人、百姓の間から出て社会悪と斗うと自称する俠客と、もに形すくられた社会史のひとこまである。

脱藩の会所もつくる國さかい

舞台での浪人ごこつかがあり

長崎港そんな藥物とも見えす

法寺で開催▼川雑岡山支部句会

は四月廿八日弘済會ハウスで開催

▼奥田露集氏を送る句会(山口縣)が

四月廿八日夜、神字部川柳會で開

かれた▼さつき川柳社(大阪市)で

は五月三日さつき同人室で句会開

催▼岡山縣赤盤郡竹枝村では直原

七面山、服部十九平両氏を招いて

四月下旬に川柳を聞く会を開催

▼櫻まつり協賛川柳會が津山市の美

作川柳社の手で四月十五日開催さ

れた▼片山百郎氏が第十六回夕刊

山陽新聞記者文藝川柳の第一席

(賞金港千円)に入賞した▼阿達

義雄氏(新潟縣)は従來師範學校

と新潟大学の兼任だつたのが四月

から大學のために更になられたので古川

柳研究のために更にウチンクを傾

けられる▼福岡葉路氏(廣島市

段原日出町五一三へ移居)石崎柳

石氏は四月移動で廣島縣上下高等

學校長に榮轉された▼佐野牛歩氏

(大阪市)の町名が阿倍区野三町

二丁目十三と改称▼岸本水府氏は

大阪市西成区有樂町九へ轉居▼松

村晴氏は下關市長に立候補された

が惜敗された▼石井伸生氏は奈

一路集

お経 戸田 古方選

第二章のお経へ最早足しびれ 不
 弁慶の目玉お経はうわのそら 芦穂
 子が死んでお経の長さ有難さ 法界坊
 蝶々も詣りに来たか墓の経 同
 欄方が長い跳経に舌を打ち 夜潮
 写経する窓へ雀が話しかけ 芳泉
 梵語本小僧は頭叩かれる 山雨楼
 経の余いんが蜂の羽音になる 曉童
 お経読む佛間の空気がすまい 三平
 すらすらと跳経む姉の白い衿 茶々
 お経済んで故人も酒のすきな人 太路
 心経も覚え通路に出る気なり えい
 還俗がさせたい尼の経の声 秀峯
 ぬげ露路お経け派手に開えて来 貴山
 大法会冥土へと行く経の声 古心
 お釈迦さまと話してまな祖母の経 青雨
 あの世へも聞えて欲しいお経読む 如川
 片言の孫がお経についてゆき 愛子
 救われた悦び日々の正信傷 梧櫓
 半鐘へお経の席が乱れかけ 鉄兒
 焼香になつてお経は早くなり 薺花
 温上りの汁をふきくお経あげ 木声
 末つ子に鐘たかかせているお経 白溪子
 村中が跳経峠の地藏盆 孤峰
 待ち切れぬお経に帯る御用開 蛙声
 二日酔和尚に経の長すぎる 四季無
 刺げたとこ叩く木魚のよい響 潤年
 飲めば僧お経の喉で安來唄 同
 もう泣かぬ顔で列なる枕経 十字路

佳・経文へ阿彌陀如来は無表情 宵粒子
 佳・もう終る頃とお経の座に帯へり 迷窓
 佳・南無阿彌陀く老母のしあはせ 鮎美
 佳・観音経誦んじた子が天折し 十九平
 佳・候補者を母はお経の座で見つけ 旅風
 人・職人に短いお経たのまれる 葉光
 地・心中に通りますがり経を誦み 斗四翁
 天・おつとめへ妻も坐つて一家無事 三思楼
 軸・経本のほこりをはるてから坐り 古方

ホテル 吉田 水車選

ホテルとは名のあしあしが干してあり
 また一つホテルの窓の灯が消える
 ホテルから妻にすまじいべんを執る
 日本間もあつてホテルの如才なし
 ホテルから電話出家の娘がもやべり
 人気がホテルまで来るサイン攻め
 ハネムーンさつらもホテル初めなり
 轉落の一步ホテルの一夜から
 滯留のホテル疊を恋しかり
 出る時は別々になる安ホテル
 榮轉のしばらくホテルから通い
 出張はホテルで会議あつただけ
 取引はホテルでしたが偽手形
 ホテルに來給えとは出世たものさ
 閑散なホテル女中と球を突き
 方大
 佳・ホテルで泊りお晝はうごんにし 孤舟
 佳・欠航をホテルで明かす霧の夜 太路
 佳・選手開空のホテルにちと困り 千代男
 佳・味噌汁がほしいホテルの朝さなり 正司
 佳・ミヤコホテルで競輪の氣をしろの 斗四翁
 軸・安ホテルの窓に鏡台など映り 水車

良縣五條局区内五條町中へ轉居
 ▼水木眞弓氏(松江市)が四月廿一日に永眠された。屠指りの研究で名を知られ川柳学者として斯界に貢獻された。同氏の長逝は川柳界にとつて多大の損失である。▼道田葉平氏の母堂せいさん(大阪市)五月三日八十六才の高齡で永眠された。謹んで悼む。▼四月号の「新川柳評釈百句」中の普天氏の「風呂敷に包むと米の哀れなり」は昭和廿一年十一月十日号の「週刊朝日」に「風呂敷に包むと米も哀れなり」(久良俊)と一字違いの句が發表されていると山雨楼氏から注意があつたので抹消することとした。

▼市川土隅氏(シヤトル市)「北米川柳」の主宰者)が三月廿七日に永眠された。謹悼。

新刊紹介 長編詩「熊野創世記」(和泉丈吉氏著)が東京都千代田区神田神保町一ノ六五岩崎書店から刊行、限定版定價二百八十円

社の黒板

★本社六月句會は

二日(土)午後六時半から

大宝文化會館で

(南区三休橋南詰東入北側)

兼題「瘦我慢」「見合」「仮病」

席題は当日發表

柳話、句評等

会費 五〇円

來會 歡迎

★川雜千日前連絡所では

夏時間の間、月、水、金の午後三時から六時までに時間を変更したので、せいんお立ち寄り願いたい。

道順は南海を東へ、大劇の四ツ辻を南へ、東側で四軒目のところの小路を東へ這入つて「べにばたん」の階上

★BKの川柳募集

題「手遅れ」中島生々庵氏選評
 締切 六月末日、葉書に二句幾枚でも、
 放送 七月十四日午前七時十五分

賞 佳作五名に薄謝
 投句は大阪市東区馬場町
 大阪中央放送局川柳の會宛

一品料理と生そば

グリル芝鶴

上六キヤビトル映
 画館 東三軒目

瓶の銀山

大阪市大塚區長瀬
 西通一丁目四十四番
 山銀株式會社
 電話 四七四七番

いのある句を創れ



投稿規定
▼用紙は原稿用紙▼文字を正確▼開催月日及場所記入▼締切毎月廿五日▼投稿先本社宛

四月例会 (本社)

四月七日 午後六時

於大宝文化会館

四月七日日本社例會が大宝会館に於て開かれた。路郎師の柳話は題を課して作句する理由及び句會の課題と新聞柳壇に發表する課題の運び方の相異に就いて説かれ、水谷鮎美氏の月評は志津さん、古方氏の句に付いて其心算を述べられた。兼題、席題の披露後採点の結果、不朽洞優賞カツフは中島生々庵氏の手に落ちた。九時半閉會。

出席者 路郎・喜久堂・翠光・黒天子・紫香・夢裡・十字路・愛論・幸男・一杉・てるを・天貧・三司・葉・正司・淡舟・史葉・方樂・鮎美・哲水・無人・春柳・笛生・古方・修三・芦穂・貴山・瓜平・常夜灯・春齋・よかる・生々庵・綠雨・玲之介・晴峯・牛歩・香林・豆秋・嗣骨・恒明・妄夢・伸生・志乃布・博也・一步・霞乃

兼題「足音」 麻生 路郎選

足音の乱れ 税吏の來た報せ 牛歩
美しい 仲居 足音たてぬなり 哲水
失業へ 足音迄が小さくなり 草骨
足音でわかつてましたと喜ばせ 葉
お二階は レッスンらしい足の音 修三
足音が 尾行してゐるなと思ひ 鉄
足音も 新妻と言つづまじき 苑
足音もなく 室を出て行く元子爵 菜女

張り込みへ足音ちんばらしい音 十字路
働いて 掃る ゴム靴音のして 貴山
こんな腹立つてますよ足音で去に 葉
足音は家を違へた音で去に 紫香
足音がドヤ／＼妥協の済んだ室 よかる

兼題「灰皿」 橋本 綠雨選

灰皿へ 思ひ出が湧く友が来る 博也
吹鼓の山に 意見ははかざらず 葉
灰皿と 雑誌を置いた枕もと 春齋
寝そびれて 又灰皿を引き寄せる 愛論
よい智慧もなく 灰皿はほつとかれ 鮎美
長びいた 会議灰皿取りかえる 十九平
勤続の 記念は灰皿だけ残り 史葉
灰皿も きちんとして朝の窓 古方
灰皿に 次ぎ／＼たまる物思い 志乃布
灰皿へ 憤洩グツと押つける よかる
灰皿に 孤独淋しい 春の雨 苑女
灰皿を みつめて話とぎれ勝ち 翠光
灰皿へ 社長の癖はあからさま 芦穂
灰皿の 水へ吹鼓音を 立て 娘句樂
落ちそうなど 灰皿突き出され 瓜平
灰皿へ 勞組側はあせり 氣味 万樂
灰皿とお茶で 二時間待たされる 正司
灰皿の前で 就職かしこまり 瓜
灰皿へ まだ 思案が続くなり 綠雨

兼題「花見」 武部 香林選

花吹雪 受けて 嬉しい盃を酌み 愛論
ワンダフル ジョブを捨て 花の里 正司
今日一日は スリも花見酒に酔ひ 史葉
花を見に行きたなと 空巢思へらく 豆秋
留守居して 花見の雨をあんじ出し 葉光
櫻見の子 連れは地味に酔ふて 葉夢
質屋の ビラを花見の旗でくれ 葉
細櫻の 御宴の頃の懐しみ 十九平
父さんを 連れて戻つた花見酒 博也
偏路道 だれも氣付かず花見頃 三司
ガムかんで 下戸の花見のあわれなり 春柳
相談がまと まらない間に 花が散り 忠美
満開を 避けてふたアリのだけの花 妄夢
法界屋 花見の客の酌もうけ よかる

教会の花見サイダー瓶を提げ 十九平
花の下子供を春に寝てしまひ 喜久堂
花見酒 炭坑節で暮れかゝり 生々庵
九分咲きの ことで写真屋客を呼び 妄夢
花見酒 ぬけて 各間の紅つばき 葉
乗り越した 駅に思はぬ八分咲き 十字路
借のある 奴に花見の道で逢い 芦穂
老妻も 少うしいける花の下 翠光
無情 感悟る 花見にまだ遠し 葉光
満開は 下見の幹事だけが 見て 牛歩
やけくそにならんと 花も見に行けず 豆秋
花見酒 せい一ばい に晴れ渡り 生々庵

席題「パトロール」 竹田 芦穂選

パトロールしりやに 雲雀鳴く日なり 玲之介
パトロール スカイサインへ 足をさき 春柳
スマートに見へては いるがパトロール 豆秋
パトロール 女の 話もして 歩き 喜久堂
パトロール 交代 近く 指令来る 十字路
パトロール 口を巻かれて 掃る 梯子酒 史葉
パトロール へ 血の氣がひらいたパトロール 恒明
夜霧の 霧ハイスピートのパトロール 春柳
パトロールの 眼にも入陽は美しい 玲之介
左側 歩いて見たいパトロール 常夜灯
姿を捨て ネオンの 街のパトロール 妄夢
午前二時 星を見て いるパトロール 哲水
パトロール 夫婦げんか 聞いて 夢
猫の 窓じやまて 通るパトロール 恒明
パトロール 昔をおもふ 夜霧の 灯 鮎美
パトロール カーが 宣傳らしく 着き 万樂
パトロール 駅 送送つて 記事になり よかる
パトロール 大 飛城に 散る 櫻 笛生
通行止の 露路を 透かして パトロール 恒明
夜櫻に ふと 立ち止る パトロール 修三
アベツカを バックミラーに パトロール 正司
深夜の 河岸を アベツカ パトロール 博也
パトロール 事件があつた 走りやう 葉
パトロール 見えて見ぬふりを するに 遣ひ 玲之介
まっ晝間 判一押し パトロール 古方

版写膽田阪

二五町田芝区北市阪大

会商田阪 株式会社

番一九九五 島福 話電
番四—番一三六五

逢鬼へ パツト 照らしたパトロール
花見では 御座らぬアベツカパトロール
もうかりさうかと パトロールも 背の口
アベツカパトロール 見かほりき 樂でなし
氣紛れの 散歩又逢ふパトロール
パトロール 婦警歩幅に 氣をつい 芦穂

席題「娘」 浪 玲之介選

末ッ娘が エリ子の子の 夢を追つて 哲水
終電の 娘煙草の 火を借りる 笛生
人妻になつた あの娘の 写真が 出 幸男
質草は 娘であつた 頃の 柄 恒明
氣が折れて 娘に 愚痴も 云ひを 十字路
父さんと 歩けば 別の 娘なり 生々庵
あんな 娘が 慈しと思ふ 茶の手前 豆秋
愛の 序曲に 娘の 夢多き 春柳
アパートで 娘を持たぬ 幸を知り 香林
まだ 下りそう な衣料へ 娘が 五人 万樂
醜聞を よそに 娘の 輝ける 翠光
家出した 娘 都金の 灯をおそれ 芦穂
嫁に 慈しい 娘 先約 出来て 居り 天貧
娘の 着物じつと 見取れた 母の 顔 志乃布
この 娘も かくなるのか 妻の ヒス 普水
母親に 娘の 鉢そつと 聞き 生々庵
窓際へ 来れば 娘は 唄になり 紫香
間違えた 娘の 声が 妻に 似て よかる
なんの かんとの 娘の家へ よく 迫ひ 牛歩
娘とも 二号とも みて 振りかえり 妄夢
新柄の 銘仙 娘だらく がしたく なり 葉

本業の傾りへ母は嫁の事
二三行だけであつて旅便り
誤解されたまで矢張り筆不精
またたよりとだて母の氣をませ
誤解まだとけの便りを書き綴り
追伸にやつと本当の用事かき
日を置かぬ便りとなつておそろし
水を買る屋台レモンの色を着け
ハイカーの足をとめてる水が
水道課大阪湾へ出張し
水打つた駅で只乗りひき緊り
極道の果てにさつと水の味
まあ飲めとんざわ水を持つて来る
地下足袋で吞む水道の水の味
岩少し水にぬらして蟹が逃げ
風邪薬コップの水もそへて呉れ
踊る子へ一家総出の加工すし
酔うだのが少し踊の輪を乱し
手拭を出せとは社長踊る氣か
若き日を思ひ出させる母の癖
三味線に合はぬ踊りも着てす
人生の春シベリヤへ置き忘れ
人生のスタート妻も嫁ぎに出
人生をアドルム鏡でかたをつけ
カストリを吞む人生をみすかされ
人生の伴侶に聖書手離さず
捨てられて人生観がまた変り

雑川
ウイロー社句会(布味)

古川鹿花麗報

歌・泣

十八番歌はされてからお附攻め
証賀新年初春の歌も添へ
パスルムだけで自信のもてる歌
すき腹に余計こたえる労働歌
ミシン踏む調子をデキスの歌にせ
旅便り敬具と書いて一首添え
プラトニック歌に委ねてはかき
煮こはれも拭かやラチオへ歌マニア
ハトポツボだけで先生責ふさぎ

久似於
紫香 萬滴 博也 水客 花村 一杉 哲水 仰づる てるを 花村 三司 紫香 久似於 水客 青丹子 三司 香林 博也 天貧 仰づる 久似於 主二 久似於 青丹子 小松園

未亡人生活と別な歌日記
今泣いた顔とも見えぬ娘のまは
慰めに行つて一緒に泣いて来る
母上と一行流んで涙ぐみ
泣き落す手も戦後派の一つとか
今一度ママと呼んで母は泣き
思ひ切り泣き度い夜なり銅羅が鳴る
泣く程の遺産にあらす養父の死

雑川
下関支部句会(下関市)

三月二十四日 於 下関駅会議室
國弘半休門報

電話・線路・看護婦・硯・花散る
家内中みな寄つてくるい電話
送話口おさえ返事の智慧を借り
移り香の受話器を秘書の手から受け
おそくなる電話の父は酔つてる
主任の電話何だか氣になる異動前
お電話と言つて給仕は眼で笑ひ
叱られた電話しげらく立つている
電話口もうだまされぬ妻が
あらたまる電話は社長と知つてから
電話口じやれる子猫を足で追ひ
容態を電話で告げる長廊下
應答で話が読める電話口
近道を線路にとつて氣が咎め
星の泣くような線路のちむむ音
線路事故予定以外の名勝を見
やれこのさ線路工夫の朝の声
朝寝坊何時も線路をかけて乗り
目印の線路なか／＼遠い道
おれの庭通さぬ線路よく曲り
線路にもこぼれ茶種が花をつけ
看護婦の親切妻は氣に入らず
看護婦に又叱られた快復期
看護婦も一緒に写す退院日
臨終へ看護婦さんは無表情
オールドミスは婦長に過ぎぬらしく
お祝を書く硯箱のはこり吹く
寄せ書へ幹事は硯持ち廻り

魔花麗 野涉 我樂多 法寸 晚翠 柳雪 峰葉 純香

月給日来るまで花は散ると言う
花びらをたいて茶店吳藍を巻き
雑川
出雲支部句会(出雲市)
食糧分会
三月三十一日 石橋 齊兆報
辞退・夜櫻・下駄・事前運動・棟
上げ

雑川
岡山支部句会(岡山市)

三月二十四日 於 弘済会ハウス
藤本 潤年報

混雑・踊り・ぼんやり・入学・堤
にぎりすし・時計
混雑へ一寸刻みの歩を運び
混雑は押された奴とまた並び
混雑へ子供がいます肘を張り
叱られて踊りのボイスで逃げ来る
踊れない女レコードのキツを巻き
子の踊り親も手を振り首も振り
新柄に見とれ我子を見失い
両親の愛へぼんやり伸びただけ
二代目はぼんやり家を継いだだけ
返事せぬ子が一人いる入学日
卒業も入学もある子沢山
長男は新品づくめで入学し
二番目はもう路がぬ入学日
入学のかげんで兄のあるを知り
拙声機花の堤はまだ寝ない
山羊の氣も知らず土埃の草を焼き

代仕男 一月 日出夫 代仕男 聖一路 春軒 齊兆 緋郎翁 雲舟

小兒科 内科 性病科
安岡醫院
安岡三四郎
道頓堀・日本橋南詰
東へ半丁浜側
電話南(三)二四六

雑川
大牟田支部句会(大牟田市)
三月廿日 於 三樂人事課
富田 一葉報

手についた醬油もなるにぎりすし
握りすしわさびのこは親が食ひ
金鎖親分という顔で下げ
腕時計耳にあてがう癖がつき
大時計もう客引の出る時分
その昔衣かえした古時計
新型の時計文字板よく読めず
電燈を消すと時計が耳につき

満年 九坡 忠美 九坡 久米雄 千代男 大甲帽



編輯室にて

▼軒先の桐の若葉がさわやかな風をうけ、生々として揺れている。買った時には一尺二三寸の丈けしかなかったが、今では大屋根よりも高くなっている。太さは、もう下駄でもつくれそうである。▼本誌もこの桐の樹のように、日に月に伸びつつあることを思うと愉快である。▼本号の表紙も福富雷童画伯を煩した。画伯は喰べさしの鯛を描いて見たと云つて持つて來られた。「人と鯛、鯛は脂したたり」や「鯛鯛なすびなすびの日が続き」と云う句を思い出した。画伯の鯛からはそうした生活苦はにじみ出ていないが、眞にせまかつた写生の妙味には頭が下ががる。こんなものまで画にして見ようと思つた。対するうちこみ方にも敬服させられる。斯うした態度は柳人のひとりにも持つて欲しいと思ふ。▼山路閑古氏の小説「將軍娘」の続稿が、締切までに届かないので、編輯者まごつかせた。一回抜くより仕方がないから、私に「新川柳評釈百句」の続稿を続けてくれと云う。ヨシ／＼

來なかつたら書くが、必ず來るよ、兎に角二ページあけて編輯して置けと云つたが、それでも「柳俳」に、身辺舉動が報ぜられてゐるし、今後は大新聞や大雑誌の外は執筆しないと書いてありますから、尻切れトンボになるかも知れませんがよと心配そうに云う。それだつたらなお更大丈夫だよ、うちの雑誌は柳誌中の大雑誌だよ、「文藝春秋」よりも大きいだろうと云つたので笑つて引き下つた。こんないきさつがあつたの続稿である。御愛読が願いたい。▼福田山雨樓氏の「川柳原理」は本号で完結したが、闘病生活の苦惱を押し切つて執筆された大論文であるだけに、読者諸賢を裨益する点が多からうと思ふ。かなりエッセンスとして書かれてあるので、じっくりと読み返し、同氏の意のあるところを充分玩味していただきたい。▼四月廿二日の撰句樂居でのアフエアである。私の句碑の除幕式がすんで、句会の席上、作句の合間々々に室内で鶯が鳴いた。靜にそれを聞いてみると、何んとも云えないほの／＼とした心もちになれた。少しも人おじをしないで、すこしづゝ間隔をおいては鳴いていたが、いかにも句会の伴奏らしいので、みな心からよろこんだ。あちこちの句会へ出席したが、はじめての経験である。今年の選挙には選挙場で蓄音機を鳴らしたところもあるそうだが、それとコレとは比べものにならない。▼五月十三日の日曜に大和の五條であかれ会主催の川柳大会があつた。招かれて「川柳と俳句」と云う講演と「割箸」の漫をした。なか／＼の盛会で予想以上の集りだつたところが出席者の中に、啞者と聾者が來ていた。啞者は奇声を発して兼題についての質疑をなし幹事をうるたえさせたが、聾者は自分の句が地位に披露されても素知らぬ顔をして、た。啞者は吉野山から三里も山奥の村から新聞を見て出て來たのだそう。その熱には動かされた。聾者は大阪から疎開して來てそのまゝ居ついたのでさうだ。昔大阪で句会に出たことのある旧夢を聞かされたので覚えていた。二人とも不具の身で川柳に打ち込んでゐる姿を見せられて、しみ／＼としたものを感じた。中には人前に不具の身をさらすをはちて、徒らに懊惱している人達が相当にあると思ふ。そんな人達には出来るだけ、こちらから手をさしのべるようにしたいものである。▼川柳に繋がる縁は血に繋がる縁よりも濃い場合を往々にして発見する。(路)

最短時間 大坂一名古屋

3時間 特急

毎日3往復

特急料金 ¥60

上本町發 7.40 12.40 16.40

名古屋發 8.00 13.00 17.00

創立明治38年

優秀ゴム製品の先駆

株式會社 角一ゴム

本社並びに工場

大阪市福島区鷺洲中二丁目五番地

電話 福島 3051-2 3451-3

東京・名古屋・仙臺

風趣豊かな おなじみの「食道樂街」

おなじみの「食道樂街」 七階

おなごらんとんかつ

中華料理のお

ビール、ジュース

(外食券食堂)

茶屋「甘樂」開設

松坂屋 大阪日本館

Made in Occupied Japan

發行所 川柳雜誌社

大阪市住吉局西區西五丁目二五番地

編輯 藤生 幸二 郎

印刷 藤生 幸二 郎

電話 大阪 七五〇五〇

募 集

課題吟募集

網 棚 (十句) 浜田久米雄選

水 藥 (十句) 北川春巢選 (六月廿五日締切)

母 巴斯 (十句) 尼 綠之助選 (十句) 上田 翠光選 (七月廿五日締切)

毎号募集

近作柳樽雜詠廿句 麻生路郎選

川柳塔 (雜 詠) 麻生路郎選

文章 (評論・研究・感想其他)

投稿規定 (毎月廿五日締切)

▼投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。

▼「近作柳樽」は一般作家の雑吟を募る。

▼「課題吟」は何人でも投句が出来る。

▼「川柳塔」への投句は不朽洞會員に限る。

B列5号 毎月一回一日發行

川柳雜誌 第六卷

一册 金三〇円 (送料三円)

(戰轉禁)

牛ヶ年概算 金一九八円

一ヶ年概算 金三九六円

昭和廿六年 五月廿五日印刷

昭和廿六年 六月一日發行